THE Y.W.C.A. MONTHLY

女子青年界

三月號

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可
大正十年三月一日發行（毎月一回一日發行）
女子青年界第十八巻三月號

要目

日本基督教女子青年會發行



消化と毒けし
仁丹
金言
己の仕事を己れが樂しみと思へ。
ホワイトレー
桃咲く頃ののどかな気分と……
仁丹のんた爽やかな氣分

第十八巻第三號

女子青年界目次

大正十年三月號

「診察毎朝及毎夕　但祭日及日曜之他」
院長診察　月、木、金、午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京市麹町區三番町三十番地（市ケ谷見附內）
電話番町六二番 五一六番

東洋內科醫院

院長　醫學博士　高田畊安

電話ちがさき二番

南湖院

神奈川縣茅ケ崎海濱（從停車場半里）
河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤
院長診察　土曜日午後　入院診後應需
「診察毎朝　但祭日及日曜及土曜之他」

NAKAYAMA SHOTEN.

IVORY CARVER.

Manufacture of

Damascen Ware, Bamboo Sticks Wooden Works & Japanese Curios.

No. 27, Bentendori Nichome, Yokohama.

TEL. NO. (HONKYOKU) 597

横濱市辨天通二丁目
二十七番地

美術品並ニ雜貨直輸出 卸小賣商

中山商店

電話本局五百九十七番

診察　毎夕五時——七時（日曜、祭日休）
　　　姙婦、乳兒、相談
入院　姙婦、產婦
保育　幼兒晝間保育（早朝——夕暮）

東京市本所區柳島梅森町五十五（錦糸堀終點下車）

贊育會本所產院

電話本所六〇三〇番、振替東京三九〇〇〇番

會員募集
通常會員毎月五十錢——一時金百圓以上
特別會員同二圓——同三百圓以上
維持會員同五圓——同千圓以上

理事長　醫學博士　木下正中


紳士の鬚剃に
カテイ石鹸
安全剃刀
クラブ洗粉
乾きタオル
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
文明的な皆様の御家庭へお勸め申し上げます
學理上―實驗上一番齒の爲めに良い
世界的の
クラブ齒磨

女子青年界　第十八巻三月號　大正十年三月一日發行

歸朝の御挨拶に代へて

河井道子

雜誌締切りの後に少しでも餘白があれば御挨拶までに一言掲載て貰ふと思ふて大急ぎで筆を取ます。本誌購讀者諸姉は常に神の御恩寵の下に心身共に御健全である事を祈ります。私が一ケ年間日本を留守にいたしました其間、諸兄姉の多大なる陰陽の御援助を本會に與へられました爲、私の豫期以上に發展しつゝある事を見て感謝し且驚喜する次第であります。種々土産話も今後本誌上に記載いたします。旅行中雜用に追はれ思ふ様に御便りいたさゞりしうめ合せを之から追々いたす心懸けで居ります。私は二月十一日に渡邊百合子氏と共に無事に歸朝致しました。當日は降雨なりしにも不拘、京濱間の青年會關係の姉妹方多數御出迎へ下され、私共の喜びは例へ方もありませんでした。

東京に落着く暇もなく、郷里の病める老母を見舞に行き、十九日に上京して本部主催の新井田鶴子氏・

招待の茶話會に出席、其後直ちにミスマシユーの代りとして昨年私の留守中日本に赴任されたスコット幹事と三日間協議のため鎌倉に行き、やうやく廿三日より本部の事務所に出勤することゝなりました。從つて一ケ年間に於る移動もよく判りませんが、其間に本部の事務所が錦町に移轉し、職員一同元氣よく活動し、支部よりの報告が机上にのつて居るのを讀んで、全く長足の進步である事を衷心より感謝して居ります。

私の歸朝に際し祝電及賀狀を下されし諸兄姉に、一々御禮狀を差出しませんが、失禮をも顧みず誌上で御禮を申上げます。浦鹽ストックの脇みさ子氏や、天津の大平耕成氏など遠方の方々よりも御親切なる御手紙を戴き、眞實に私は自分の惠まれて居ることを感じ、今後なほ一層の奉仕を遂げ度く願つて居ります。

又留守中神の召によつて天國に逝かれし方々を偲ばずには居られません。仙臺の岩崎幾子氏と其父君英學塾の藤さよの氏、搜眞女學校の井上元小夏氏、植村惠子氏、横濱共立女學校のミスルーミスの御兩親、東京青年會委員小室氏の御良人、今西糸子氏の御令妹、其他知人にして逝かれし人の數多きに驚いて居ります。大阪のミスハードも米國にある父君御永眠の爲歸國せられました。之等を思ひめぐらし神によらずば、私共に一瞬時も平和のなき事を感じます。逝かれし方々を偲ぶと共に遺族の方々、又我々一同が愈々神の聖旨のある所を思ひ、鮮かな光明を認めて善且忠なる僕の職を全ふし度く祈らずには居られません。御同樣多忙の折柄諸兄姉の上に神の御指導豊ならん事を祈ます。歸朝の御挨拶に代へ一言申上ます。

ヘレネズムとヘブライズムに就いて

二階堂眞壽

3

レオナルド・ダ・ビンチが恁んな譬喩を談した。

ある鋭利な剃刀があつた。錆ひとつなく鏡のやうに輝いてゐた。太陽の光が自分に射してくると眩ゆい光彩を放つた。そして剃刀はひそかに思つた。「自分は質のよい鋼鐵で鋭利なものだ。こんなに輝やかしく光つてゐる。こんな立派な自分があんな田舍の百姓男の髯面などを剃つてたまるものか――おれは匿れてひとり樂しまう。」

　そこで剃刀は眞暗なところへ退いて自分だけを大切にしてゐた。ところが一年程たつてから、ふと自分をまたあの輝かしい太陽に照らしてみたくなつたそして明るみへ出てみると、意外にもあの冴え切つてゐた自分は、まるでお萩餅のやうに眞赤に錆ついてゐた。

　こんな譬喩は陳腐なものである。けれどあのダ・ビンチの口からこんな言葉をきくと不思議な感銘を深くするのである。彼は善の素質も惡の素質も極端に所有してゐた人だと言はれてゐる。彼は文藝復興期の偉大な天才である。いつの時代にも大いなる思想復興期には極端な思想潮流がよく一身に具備されるものであるが、ダ・ビンチの如きも希臘思想と基督教思想とを恰も大洋に暖流と寒流と流れ合つてゐるやうな、彼の一身に所有してゐた。

　普通にはギリシャ思想即ちヘレネズムは快樂的、愛己的、現世的、樂天的の思想と見做され、基督教思想即ちヘブライズムは禁欲的、愛他的、來世的、

4

厭世的の思想として分類されてゐる。一言にして言へばギリシャ思想は肉を主とし、基督教思想は靈を主とすると言はれてゐる。そして靈と肉とは矛盾して容易に調和されなくなつた。肉を生かさうとすれば靈が亡び、靈を生かそうとすれば肉に死なゝければならないと言はれてゐる。二つの思想はどうしても兩立しないものであらうか。

⁂

自分は思ふ。ヘレネズムの眞意義は他人を自己の裡に生かすことであり、ヘブライズムの眞意義は自己を他人の裡に生かすことである。無論、自己を生かさないで他人を生かすことも他人を救ふことも出來ないといふのも眞理だ。しかし始めの半生は自己を生かし終りの半生は他人を生かすといふ風に生活を二つに切り放して考へたくはない。眞の基督教は他人を生かすことゝ自己を生かすことゝは離れたものでない。

⁂

「…………けれどもつともつと惡い事は、弱い弱い性格が作り出す醜さです。こと毎に私の弱さはあらゆる所にそれを現出させます。私は最も弱い女性の中の最も弱い女性なのです。弱いことはほんとに醜さですね。それを感じます。ほんとに有島さんの仰有つたやうに弱いから罪人にもなり得ない偽善者なんです。それが一番いけないことですね。自分をいつはつて、人を瞞して。

神を信仰する事も出來ず、人を深く愛することも出來ず、自分をたのむには餘り自分に失望してゐるし、ほんとに今どうして好いか解らなくなりました。

盲目的な衝動に從ふか、聰明な愛と眞面目に導かれるか、ふたつの分れ目に私は立つてゐます……」　（Sの手紙）

「……しかし自分で不眞面目と知りつゝそれに意識的に墮ちてゆくのはいけないと思ひます。その時に『自分は弱いから』といふことは口實であつてほんとの言ひ譯にはなりません。弱いといふことを以て自己辯解の具に供するのは、少しく卑劣だといふ感じがします。自分が弱いといふことを知つた時にはその弱みが反つてやさしみになる時だと思ひます。所謂ブラウニングの「弱みにある强み……」或はパウロの「われ弱きときに强し……」といふ境地に近づいてゐるのだといふ氣がします。「自分が弱いものだから……」と言つて自己を辯解し自己の行爲を正義附けやうとする人は（無事

さん流に言へば）神の國にも新しき村にも這入れない人だと思ひます。ともかく盲目的衝動といふものも聰明な理智の光と愛の暖かさに伴はれねばなりません。衝動だけに動くと、あとで後悔がきます。理智だけで行き過ぎた生活をすると、空虚になります。自分は肉體にも靈魂にも損をさせない生活をしたいと思つてゐます。

（Nの返事）

こゝに於て人は誰しも迷はなければならない。禁欲精進の生活必しも人を生かさない。また享樂的本能肯定の生活また人を救はない。（本能はなくてならないものだ、だが生な純化されないまゝで本能を肯定するのは危險だ）

われ／＼はうつかり聖人の言葉に從ふのも危險だ自分が聖人にもなつてゐないのに、聖人の言葉や聖人の行爲を模倣したからとて、それは空虚な生活だ。

それならばわれらは何を心の眼の標準にして善惡を區別し行爲を取捨して行つたらいゝか。

自分は偉大なる神秘思想家マイステル・エツクハルトによつて教はつた。それは愛を標準とすることである。自分の心に愛を感じさせるものは善だ。心に愛を起させないものは惡だ。われらは愛を感じるものに大膽にくみすべきだ。ピラトがキリストに愛を感じながら、愛を感じなかつたパリサイ人に與みしたのは、彼の内心を裏切つたのである。それが一番いけない罪惡だ。その時に、「自分が弱いからだ」と云つて辯解してもそれは無益だ。弱いことには同情すべきだが、應報は必ず覿面である。

われ／＼の内心の最深最眞の要求に從ふのが善であるけれども、とき／＼最深でないものを最深と認めて仕舞ふ隙が生じ易い。けれども愛はその人の僞らない要求である。大抵の場合に愛はその人の性格に相應しただけの最深最眞の要求を教へてくれるものである。キリストに逢つて内心深き愛を感じたマグダラのマリヤは祝福されてゐる女であつた。

愛を感じないのに愛を感じたかの如く裝ひ又は愛

を感じてゐるのにそれを否定するのは眞に自己を損ふものである。愛は僞ることが出來ない。大水も消すことが出來ない。それ故に愛は心の中の唯一の標準である。

愛は我がまゝなものだ。そして我儘が通る。若しも理智が、ふたつの愛するものゝいづれかひとつを選ぶべきことを愛に命じても愛は肯じない。ふたりの子を愛する母の如く愛はふたつをともに抱く。靈と肉とは仲の惡い兄弟かもしれない。けれどもふたつのものを愛する愛が私の心の衷に理智よりももつと高いところに坐つてゐる。

キリストの所謂「生れ更つた人」とかパウロの「衷なる人」が覺醒してゐる人とは、わが心の衷の至聖所に微笑んでゐた愛がわが凡てに、肉體にも理智にも靈魂にも predominate してゐる狀態であると思ふ。

＊＊＊

マイステル・エツクハルトが言つた。

「若しも心靈が愛よりも先に他の德を顧慮するならば、その德は空虛なものとなる。

愛はその最も眞正なる最も純粹なる性質に於て神に外ならない」。師が言つた、「愛の目的は善である。その目的にこそ愛は凡てその動作を向けるのである」と、而して善は神である。

眼がものを言ひ、舌が色彩を見分けることが出來ない位に、愛は善以外の他のものへ外れることが出來ない。

＊＊＊

ダビンチの剃刀の譬喩は愛のなき、低き自己肯定は死であることを教へる。

エツクハルトの言葉は、眞實な愛に從ふならば靈魂も肉體も本能も各々その處を得て完全なる幸福を享受し得ることを暗示してゐる。

他人を傷つけて自己を生かすのでなく、また自己を傷けて他人を生かすのでなく、自己をも他人をも生かすことが凡ての場合に於ける基調であらねばな

らない。

「假令われ我が凡ての所有を施し又焚かるゝ爲に我身を與ふるとも若し愛なくば我に益なし。」

今日ロシアのナイヒリストでもなければ言ひさうもないやうなことをパウロは思ひ切つて言つておいてくれた。我々が愛しもしないのに、義務の觀念や習慣から、いくら他人に好意や親切を盡してもそれは我に益のないことだといふのである。愛する以上に親切な言葉や親切な行爲をするのは虚僞である。我々は思ひ切つて愛を大膽に實行したい。その爲には先づ愛を欺かないことである。

愛さないものにはハガキ一枚でも書かぬがよい。愛さないものには路で逢つても心にもないお世辭を言はぬがよい。さうすれば惡人はその愛のなきことを悔ゆるであらう。今日愛のなき薄情の人がこの社會に大きな面をしてゐるのは、社會一般がさういふ薄情さに對して無關心である許りでなく、心にもない好意を捧げてゐるからである。さういふ厚意は惡草に肥料を與へるやうなものであつて、反つて罪惡である。

健げにも婦人達が拒婚同盟といふ事を企てたやうに、社會一般が薄情な人に對して不愛同盟をするがよい。勿論薄情なパリサイ人に對しても心からの眞の愛を感じる深い愛の人はその人を生かす、しかし愛のないのに愛ある如く裝ふのは、反つて其人をのさばらせる。それは自分のためにも、其人の爲にも社會の爲にも罪だ。さういふ意味で自分は生命のない習慣や義務の觀念といふものが呪はしくなる。生きた聖書の敎に歸れと言ひたくなる。無論、われらはパウロの言つたやうに好まざる事をもなさなければならない事はあるが、愛さないことは絶對に僞さぬがよい。愛を僞るものは神を僞るものである。

（一月五日記）

The little blue triangle that is the symbol of the Y. W. C. A. stands for what we call "the balanced life",- that is the life that has the three sides even; the physical, health and joy; the meatal, learning and wisdom; the spiritual, our innermost selves and our relationship to God. All these are a part of the Life that God has given us out of which to make our souls, or our spirits, or the thing that is to live after we die. And that is what He measures in His balances, and how often finds wanting!

And there is a wonderful power that we can have if we want it, which will make the whole basis of our lives different, so that we do only the things that are worth-while. We can let Jesus Christ come in and take possession of all that we are. Paul did it. He said over and over again that Christ lived in him, and that the old selfish person had died. He called himself a "new creature in Christ Jesus". He was weighed in the balances and not found wanting.

The measure of the stature of the fulness of Christ! Read the sermon on the mount and think what it means to be able to be all that Jesus asks us to be there. But after all, it is the daily seeking to be our best, the following after Christ in all our relationships, thl right bearing of suffering, that brings up the fulness of our souls nearer to the standard that God has for us, the standard of Christ. For Jesus that highest life meant the cross, ana Paul, too, says, "I am crucified with Christ", yet whatever suffering comes as we are trying to live the best life, it is all gain in an assurance of Life, of a deeper fellowship with God. And God looks upon the secret things in our minds and hearts and measures us to see if we are true to the standard of the life of His Son.

英　文　欄

WHAT IS YOUR MEASURE?

Ephesians 4: 13 The measure of the fulness of Christ.

One warm night, several thousand years ago, a rich an d wicked king named Belshazzar had a great feast, at which he drank and had a good time. Suddenly while he was eating there appeared near the wall, a hand, which wrote the words, "You are weighed in the balance and found wanting." It was God's direct message to his heart, that he was far, far below the measure of the man that he might be, that he was wicked. He had lived only for himself.

We are measured in school by the definite measures of examinations, which can tell our teachers what we have learned. That is a measure that everyone can see. But if there has been dishonesty or cheating, that does not show always, and we can still seem to reach the full measure of a good scholar. There is a measure that is far surer than that, we know, and we know that many times when in the quiet places of our hearts, we test ourselves for growth, we find ourselves "wanting". Our daily prayer-time should be a seeking for God's measuring of us, using the Christ-life on one side of the scale and our character on the other. What kind of things go into our side? A heroic deed, a long prayer, a kindness to an old lady? What was our attitude today to those who were unkind to us? Often the memory of unkind thoughts takes away the happiness of a day of service. God's measure is a very delicate one, and only certain things will have enough weight to bringoour side even with the side that holds the Christ-life.

聖書研究

ピリピ書講解（八）

佐波　亘

□「終に言はん、我が兄弟よ、なんぢら主に在りて喜べ、なんぢらに同じことを書きおくるは、我に煩はしきことなく、汝等には安然なり。

なんぢら犬に心せよ、惡しき勞働人に心せよ、肉の割禮ある者に心せよ。神の御靈によりて禮拜をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我らは眞の割禮ある者なり。」（三ノ一―三）

□「終に」とあるから、或はこれで筆を擱く心算であつたかも知れません。然し乍ら原語の意味から言へば必しもさう解さないでもよいやうです。兎に角パウロはこゝに「喜べ」と繰返し、且同時に新しき題目に就て述べて居るのです。それ故これは「さて」ぐらゐに取つても宜いでせう。

□「主に在りて」喜べとあります。回心後のパウロは、主を離れての喜びといふものを經驗しなかつたのです。それは恰も電流を絶縁する場合に、そこに光も熱も起らないのと同じやうな關係でしたらう。そしてその反對に主に接觸して居る時に、彼はいつも喜悦――それは主が我らに約束された（ヨハネ傳十五ノ十一）喜悦を經驗したのです。

□「同じことを書きおくるは……」これは難解です。或は現在の聖書に洩れて居る彼の他の書簡があつて（コリント前書五ノ九、同後書十ノ十、テサロニケ後書二ノ十五、三ノ十七を見よ）、それに同樣な警戒が書かれてあるので、彼はくどいやうだが言はざるを得ないからと言つたのでせう。

□「なんぢら犬に心せよ、……」、これはコリント後書十一ノ十三以下に『斯の如きは僞使徒また詭計の勞働人にして、己をキリストの使徒に扮へる者どもなり。これ珍しき事にあらず、サタンも己を光の御使に扮へば、その役者らが義の役者のごとく扮ふは大事にはあらず、彼らの終局はその業に適ふべし』とあるのを參考にして解釋して御覽なさい。

□こゝに「犬」といひ「惡しき勞働人」といひ、肉の割禮ある者」といふのは、みなユダヤ人のことを指したのです。尤も普通に「犬」といへば、それは異邦人のことで、ユダヤ人以外の人のことですけれども(申命記二三ノ一八、マタイ傳一五ノ二六)、こゝにパウロは、それを精神的の意味に使用て、ユダヤ人と雖眞理を無視する者は、「靈的の犬」にひとしいから、斯くの如く言つたのでせう(ヨハネ默示錄二二ノ一五を見よ)。犬は見知らぬ人に哮えます。喰ひつきます。實際パウロは基督の眞理を知らぬユダヤ人に迫害されました。それですから彼は「心せよ」と言つたのでせう。危險からです。彼はこゝに三度までも繰返して「心せよ」と言つて居ます。

□「惡しき勞働人」、これは基督がパリサイ人に對して言はれた言をその儘に移して以て、その意味を解することが可能ませう。曰く『禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得んために海陸を經めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子(地獄の子)となすなり』(マタイ傳二三ノ一五)。

□「肉の割禮ある者」、割禮は奇しき宗敎上の儀式の一つです(創世記一七ノ一〇―一四、レビ記一二ノ三、創世記一七ノ一二、一三、二三、出埃及記四ノ二五を見よ)。ユダヤ人はたいさう儀禮を重んじました。彼等は實に精神よりも外形を重んじました。然し乍らこゝにパウロは、神は靈なれば(ヨハネ傳四ノ二四)、その禮拜は勿論靈的であらねばならぬことを述べ、「キリスト・イエスによりて誇り」で、たとひその儀禮は如何にともあれ、基督によれる信仰生活に於ける勝利の歡喜こそ、百の儀禮にまさるなれと言つて居るのです。そして彼は若も我らにこの心だにあるならば、割禮

の如何は問題でないと言つて居るのです。

□「肉を恃まぬ我ら」、パウロはよく「靈」「肉」といふ語を相對稱して使用ます。こゝに「肉」といふは、罪に汚れたる、生れながらの、未だ靈的覺醒のない。新生涯に入らぬ、自然のまゝの、未だ恩寵をあぢはゝぬ生活のことです。人はたとひ宗敎上の儀禮を履んでもです。斯くの如き生活は、すべて皆空です。全く無意味です。そこでパウロは言つたのです。「肉を恃まぬ我ら……」と。

□勿論宗敎上の儀禮は決して人を救ひません。割禮の如何は救の問題ではありません。ですからパウロは「肉を恃まぬ我ら」こそは「眞の割禮ある者」であると言つたのでせう(ロマ書八ノ四―八)(ガラテヤ書五ノ二―六)。

○

□然し乍らパウロは言ひました「されど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃む所ありと思はゞ、我は更に恃む所あり」。何となれば「我は八日めに割禮を受けたる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、熱心につきては敎會を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり」。

□彼のバプテスマのヨハネは絶叫したではありませんか。「汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言はんと思ふな。……」(マタイ傳三ノ九)と。またたとひ人は信仰の血統に生れたりとて、心邪ならば、その人は「蝮の裔」(マタイ傳十二ノ三四)とも謂つべしとは基督が言はれたところです。然し乍らパウロも曾て一度はかゝる空しきものを誇りとしたのです。榮譽としたのです。然り、何よりも勝りて恃としたのです(コリント後書十一ノ十六を見よ)。

□こゝに「我は八日めに割禮をうけたる者」とあるのは(創世記一七ノ一二、レビ記一二ノ三を見よ)、次に「イスラエルの血統」(創世記三二ノ二八を見よ)とあるのと共に、我は生粋のユダヤ人であると言つたのです。それから「ベニヤミンの族」とあるは大伴氏、藤原の朝臣と言つたやうに、

それは歴史的に名譽ある家系に生れたのだと言つたのです(創世記三五ノ一七、四九ノ二七、サムエル前書九ノ一、士師記五ノ一四、エツラ書四ノ一、列王記略上一二ノ二一、を見よ)。實にパウロが回心前に教會を迫害した場合の大膽不敵な活動振を見た者は、誰でもさてはと首肯せざるを得まいと思はれます。それからまた「ヘブル人より出たるヘブル人」とあるのは、アブラハムの後裔といふのと同じです。普通ユダヤ人は自分たちをイスラエルとか、イスラエルの子等と稱ましたけれども、彼らがバビロンに囚虜になつて歸還して以來、ギリシヤ人に對して自らをユダヤ人とも言ふやうになりました。それで今日ヘブルといへば人種を意味せずに、専らユダヤ人の國語や、彼らの習慣を示すやうになつて居ます。そしてユダヤ人にして、ギリシヤ語を使用ひ、或はギリシヤの習慣に從ふ者を Hellenists と言ひ、アラメイク語を使用ふ者を Hebrews と言ひました(使徒行傳六ノ一を見よ)。

□パウロは自ら「我はキリキヤなるタルソのユダヤ人、………」と言ひ、「ヘブルの語にて語り………」とあります(使徒行傳二十一ノ四十)。抑もこのタルソといふ市はギリシヤの大都會で、勿論そこにはギリシヤ語が行はれたのでしたけれども、パウロはアラメイク語をも使用つたのです。蓋それは祖先崇拜の然らしむる所でしたらう。

□それのみではありません。こゝにはまた「律法に就きてはパリサイ人」とあります(使徒行傳二三ノ六)。然も彼はたゞ單純にパリサイ人であるといふばかりでありません。彼の言ふ所によれば「わが國人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進みわが先祖たちの言傳に對して甚だ熱心なりき」(ガラテヤ書一ノ一四及び使徒行傳二二ノ三を見よ)とあるではありませんか。

□それから「熱心につきては教會を迫害したるもの」とありますが、これは彼が使徒行傳八ノ一―三にある事件を指したものでせう。また「律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者」といふは、彼が外部の儀禮に關しては、人の目の前に一點の非難もうたれなんだといふ意味でせう。然し乍らそれ

は勿論基督に見らるゝならば必ず「禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども內は死人の骨とさまざまの穢とにて滿つ。斯のごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、內は僞善と不法とにて滿つるなり」（マタイ傳二三ノ二七、二八）との非難を蒙むるべきものでしたらう。

○

□それは兎に角斯のごとく、パウロの回心前の生活を點檢して見るならば、彼は實にこの世に於て最も偉大なるものであつたと言はねばなりません。即ちその門地、その信仰、その學識、その勇氣、何一つ彼に缺けたるものはなかつたのです。

□然るに回心後の彼はこゝに何と告白して居りますか。曰く「曩に我が益たりし事はキリストのために損と思ふに至れり」とあります。なぜですか？それは次回に述べませう。讀者諸君も御研究下さい。

我等が神の心を心にする時我等は神の國にある。耶蘇はすべての人が神の心を心にすることを望んでゐた。そしてそれには耶蘇を信じて、其云ふことを理解するしないに係らず、信仰し實行する事が必要だつた。イスカリオテのユダの他の十一人の使徒は少くとも耶蘇の死後復活を信じた以後、彼等は耶蘇を信じ切つた。彼等は耶蘇を自分の頭で批評しなかつた。そして信じて救はれた。ユダの徒は自分の足りない頭をもつて耶蘇を批評した。そして信仰を失つた。そして耶蘇を信じないことは同時に現世に奴隷になることを知らなかつた。それ等の人は亡びの道へおちたのである。耶蘇の精神にふれるものそれは耶蘇を批評する事は出來ない。それは神の意志の前に跪きたくなり、仰ぎ見たくなり、たゞ受け入れたくなるから。

武者小路氏の「耶蘇」より

讀書紹介（六）

「基督に倣ひて」に就て

中山昌樹

二千年に近い歴史のある基督教會は、信仰修養書に於て隨分豊富である。しかし其中で最も廣く、長く、また深く、人々に讀まれるのは、聖アウグスティヌスの懺悔錄と、トマス・アケムピスのImitatio Christi（基督に倣ひて）とである。そして一般的といふ點から見れば、後者の方が前者に優つてゐる。懺悔錄には六ケ敷い心理學上、哲學上の議論が多くあるが、「基督に倣ひて」には、そんな議論が少しもない。徹頭徹尾、信仰と祈禱とによれる書であつて何人にも容易く領解せられる書物である。即ち「デヴォショナル・ブック」としては世界隨一と稱して宜いのである。

斯くの如き永遠の生命を有する書物を書いた當人トマス・アケムピスは一體どういふ人物であつたか如何いふ生涯を送つた人であつたか、それは興味あると共に大切な問題である。彼は貧しい勞働者の子であつた。父は或は農夫であつたともいひ、或は冶工であつたとも傳へられてゐる。父の信仰の事に就ては明らかでないが、母は信仰の篤い人のやうであつた。彼女は兒童のための學校(?)に關係してゐたといふ。基督教會の歷史中の偉大なる人物、例へば聖アウグスティヌスや、アッシジの聖フランチェスコなどを見るに、父は信仰的でなくて母が篤い信仰

そもつてゐた。信仰的感化に於る母の重大な使命をまたトマス・アケムピスに於ても見るのである。

　トマスは十二歳の時にデヴエンタアといふ處に行き、そこに七年間を費した。この處は宗教的氣分の豊かな町であつて、トマスの學んだ學校の校長のケルハルド・グロオトといふ人は敬虔な聖徒的な人物であつて、トマスは彼をいたく尊敬した。十二歳より十九歳まで即ち最も感銘を受け易い時代を、トマスは斯く宗教的な處に、斯くも信仰的な人物の感化の下に送つたのである。

　二十歳にして彼は聖アウグスティヌス教團に加入した。そして以後九十一歳迄、七十年間を修道院に送つた。七十年間の繼續せる修道院生活！　それだけでも大變な事である。ところで七十年といふ長い歳月を一體如何して送つたのか。生活と修養との爲に聖書其他の書を寫し、また信仰上の小冊子を書いた。そして大部分の時を沈默と孤獨と瞑想と祈禱とのうちに費したのである。慕はしき己が僧房にあつて、三人四人の修道僧達と共に、靜かに、信仰上の語らひをする事が、彼にとりて無上の樂しみであつた。今日は社會的知識、經驗、活動が非常に重んぜられる時代であるが、此點より見ればトマスは全くゼロであつた。ところが此ゼロであつたトマスの書が、最も深く、長く、强く、人間の靈魂に迫る力を有してゐるといふのである！「なんぢ祈る時は密かなる室に入り戸を閉ぢて隱れたるに在す汝の父に祈れ、然らば隱れたるに見たまふ汝の父は明はに報いたまふべし」と基督は教へたまふた。この言葉の實證を我々はトマスの生涯に於て見るのである。

　トマスが生存した第十五世紀は、宗教改革の直ぐ前の時代で、宗教上から云つても、政治上から云つても、一般的狀態から云つても歐洲の實に騷々しい時代であつた。ボヘミヤにはヨハン・フッスが出で

ゝ獅子吼し、他方英國と佛蘭西とは國民的獨立の確立に大努力をしてゐた。敎會の內部では大分裂を來たしてゐた…………。然るにトマスは斯くの如き事に一切頓着することなく、不思議にも社會上の大混亂の反響が、少しも彼の書のうちに見出されないのである。現代は中世ではない。社會の事柄に無頓着であることは善くない事である許りでなく、今日では、それは生存を拒否することである。然し社會の事に心を奪はれて、靈魂のことを忘れるのは、人間の破產である。そして今日は何れの時代よりも此危險の甚しい時代である。「基督に倣ひて」の此極端に非社會的な、また非現代的なところが、實は現代に最も大切な點であるであらう。否永久に大切な點であらう。

「基督に倣ひて」の根本的主張は、現世と現世に關はる一切のものゝ否定である。「この世を輕んずることによりて天國に至らんと努むるは最上の智慧なり」この世と此世につけるものは、皆一時的にして消えゆくものであるが故に、輕んずべきである許りでなく、それは我等を誘惑して、情慾をそゝり、靈魂を潔く保つことを能はざらしめる。聖書は「神は睡みたまふことなし」とあるが、トマスは「惡魔も睡むことなし」と云つてゐる。彼は只に現在の生活を無價値と見たのみでなく、進んで禍であるとした。「眞に地上に生くるは禍ひなり」「あゝ長く生くることは常に償ひを齎らさずして、却つてしば〳〵我等の罪を增す」そして彼は絕えず死を瞑想せよと云つてゐる。

現世と現世につける一切のものを否定した彼は、無論非社會的にならねばならなかつた。修道院に隱ぢこもつて、外出を出來るだけなさず、人との會話も成るべく避くるやうに努めてゐる。人と話しあつた時は、何だか自分が前よりも劣つたやうな氣分になつて歸つて來ると云つてゐる。勿論女性と親しく

してはならなかつた。青年とは話しあはぬやうにせよとも云つてゐる。斯くトマスは現世を否定し、極端に非社會的な生活を提唱してゐるが、若し此れだけであるならば、實は今日のわれ〳〵には共鳴することが困難である。然し能く讀んで見ると、トマスは偉大なる肯定をなすために、先づ此徹底的な否定を我々に要求してゐるのである。それは何であつたかと云ふに、生活の最高標準を、神以下のものに置くことを、生命かけて、全世界をかけて、拒んだのであつた。永遠の肯定をなさんがために、カーライルの謂ゆる everlasting no(永遠の否定)を叫んだのである。「なんぢら何處にあり、また何處に向ふとも神に向ふに非ざれば、禍ひなり」と云つてゐる。即ちトマスは我等の一切の生活行動を神に對する信仰によつて律しやうとしたのである。現世を否定し智的探求をも斥けたのは、實は此精神よりに外ならなかつたのである。彼がいたづらに此世を否定したのでない事は、彼が斯くまで現世の生活を輕んじながら、一方に彼の教訓が實際的であるのでも分る。彼は決して夢の如き神秘家ともならず、或はまたセンチメンタルな厭世論者ともならなかつた。實に勇敢なる道德的戰士であつたのである。「丈夫の如く立て戰へ!」との叱咤が幾度も幾度も響かされてゐる。オイケンは彼の「大思想家の人生觀」のうちに「穩健で寧ろ實行的な神秘主義者の最大なるトマスアケムピス」と云つてゐる。即ちトマスは先づ此世を否定して、人間の靈魂を密室に於て「神の思ひ」に心ゆくばかり浸らしめて後に、再び人を社會に面せしめんとするのである。

次に「基督に倣ひて」に於ける主張は、書名の示す如く、基督と我等との一致である。本書は四篇より成つてゐるが、その第三篇は聖餐に就ての教訓であつて、分量より云へば、全書の六分の一を占めてゐる。基督と我等の靈魂との一致の表象として、彼は非常に聖餐を重んじた。「聖餐のうちに、我が神に

して人なる基督耶蘇現存したまへば、われら恭しく此を受くる毎に、永遠の救ひにかゝはる效果を豐かに受くることを得べし」と云つてゐる。そして只に精神上の力を受くるのみでなく、肉體上の力さへも受くると信じてゐた。「………たゞに心のみならず弱き肉體も亦力の增し加へらるゝを覺ゆるなり」聖餐に對する彼の考へは中世紀的で、我等は委くは贊成し得ないが、然し基督に對する彼の熱烈な愛と崇敬とは、永久に活きて働く力である。「誰か燃ゆる火の前に立ちて熱を受けざらんや。況んや主は燃えてやまざる烈火なるをや」「基督に倣ひて」の一言一句の裏面には、實に基督に對する此熱愛が脈搏してゐるのである。本書か永久に人に力を與へるのも此がためである。基督の愛に燃やされたる純白の靈魂をわれらは玆に見るのである。「基督の愛より我を離らせん者は誰ぞや、患難なるか、或は困苦か、迫害か、裸か、危險か、刀劍なるか………然れども我等を愛しめる者により、凡て此等のことに勝ち得て餘りあり」（羅馬書八の三五―三七）

私共兩人去る二月十一日無事に歸朝いたし候平素の御無沙汰を御詫び申上尚今後の御親交を御願申上候

河井道子
渡邊百合子

プレシコフスカヤ（抄譯）（二）

森田松榮

ヴェリゴ家は砂漠のオーシスであつた。他家と非常に違がつてゐるのをカタヤは見た。

彼女の家の近くには、親戚にあたるシリヤ寡婦が白痴の息子と住んでゐた。彼女は息子の莫大な財産を自由にして、向ふ見ずの浪費をしてゐた。他の親戚等は彼の爲に後見人を指定しやうとした。萬事を專問家よりも貴族に判決させるのが、貴族の習慣だつたので、青年の精神的缺陷の有無を、醫師に決定させる代りに、官憲は該問題を彼の知人に決定させることを命じた。すると四方から異論が出て、一人が「フェデャは白痴だ」といふと、又一人が「フェデャは白痴ぢやない」と反對して、息子の財産からいくらかせしめやうと構へてゐるものと、彼の母から澤山貰はうと思ふ者との二つに分れた。シリア夫人は若い男を雇つて、自分の息子だと詐稱させ、彼が自分の事務をちやんと處理し得ることを證する爲に、公證人役場に入れ、自分は相變らず息子の金を湯水のやうに費つて、女王の樣な生活をしてゐた。一冬伯林で過す間に彼女は二萬ルーブルも費ひ、絕世の美人で獨逸皇帝の心を虜にしたが、正直な小さなカタヤは彼女が堪まらなく嫌ひであつた。

或時シリア夫人邸での大舞踊會の折、カタヤはいつもの癖で見たり聞いたりし乍ら、部室々々を馳け廻つてゐた。樂隊、舞踊、笑聲と歡樂とが充ち滿ちてゐた。カタヤは外側の部室まで來ると悄ぼりした姿が俯首れて立つてゐた。それは終日同じ姿勢で同じ場所にシリヤ夫人を待つてゐた奴僕だつた。彼は襤褸を纏つてゐたが、その破れ目から見えた四肢は

骸骨のやうであつた。遂に衣摺れの音が磨きぬいた床に聞こえて、シリヤ夫人が現はれた。饑餓に迫つてゐる農夫は震へたが、一縷の希望の光が彼の眼に閃いた。彼女は冷たい調子で「何の用だい」と訊いた。彼は彼女の足下にひれ伏して男泣きに泣いた。

「奥方樣、どうぞお目をかけて下さりませ。私の牡牛が死にましたのでございます。お願ひでござります。どうぞお助け下さりませ。」

シリア夫人は振り拂ふ樣に退いた。

「そんなこと、私のどう構つたことか、うちの家扶へお出で。行つておしまひ。」

其男は既に家扶には行つたので、家扶から夫人によこされたのであつた。カタヤとその姉妹達は可愛想な僕の爲に執りなしたが、彼は邸から追出されて了ひ、シリヤ夫人は舞踊室へ戻つていつた。カタヤは重い石で壓しつけられるやうな氣がした。

も一人の隣人は「自分の腹を神としてゐた」肥つた公爵だつた。彼自身は貧乏だつたが、金持の伯爵夫人と結婚し、その金で出來るつ丈の贅澤な生活をしてゐたが、かく浪費された富の泉は泥臭い小屋とむさくるしい貧窮の中に埋まつてゐた源——壓迫されてゐた柔和な農民等——から流れてゐた。彼等の銅貨、衣服、チース、バタ、パンのありつ丈が、公爵の藏にいく間に、彼等は饑えてゐた。

惡い貴族がゐると共に善いのも少しはあつた。カタヤの父は、後にある革命黨の首領になつたあのコヴハリスクの父が好きだつた。若いコヴハリスクの母とカタヤの母とは學校友達だつた。兩家は非常に親密で、邸はずつと離れてゐたが、互に頻繁に往來した。コヴハリスク家族の單純と眞摯とは、カタヤに消えぬ印象を與へた。

善い貴族達は集まると、戸を閉め切つてヒソ／＼聲で、何か論議してゐるのにカタヤは氣がついた。時には誰かがザーに反對の論文を朗讀したり、プーシユキンの詩などを誦したりした。公然とはザー反對の一言半句も誰一人云はなかつたが、貴族は内々

ザーを擯斥してゐた。それなのにクリミヤ戰爭などが起つた時、其等の同じ貴族は、自分達の領地内から集めた奴僕の幾聯隊かを惜し氣もなくザーに献じた。赤帶赤章の幾千の農民は家族から引き裂かれ、神とザーとの名に於て、働くべく又は死ぬべく送り出された。人々の思想と行爲との矛盾は、少女カタヤの心をひどく惱ました。

カタヤは兩親に伴はれて、ザー一家と親しい某公爵夫人の邸宅——皇帝でも羨みかねない素振らしい宮殿——に行くことがあつた。彼女は其時初めて最高社會と思はれてゐたものを見た。其後一同はペテログラードに行つたが、カタヤは貴族社會の花ともてはやされた。老公爵夫人は、いろんな階級の侍女と、やはり幾段かに分れた無數の召使とを有つてゐた。彼女の仰々しい御前に出る前には、吟味やら取調やら散々な目に逢はなければならなかつたがさういふ儀禮に獨り反對したのは小さなカタヤであつたその公爵夫人の圖書室にはあらゆる種類の書物——外國、風景、慈愛等の繪畫、小說、歷史、紀行文、等があつた。九歲のカタヤは「ロシヤ歷史」數卷を悉く讀破した。彼女は熱心に旅行紀を讀んだが、詳細な點を非常によく記憶してゐたので、後に一船長と諸外國の話をした時、彼は彼女が說明した土地に實際行つたことがあるに違ひないと信じた位だつた。彼女の實際的な心はまた、小麥や土地等の市價に關する商議や、父の職務上の記錄や、書簡やを硏究するやうになつた。

彼女は農民の待遇され方を知れば知る程煩悶した十歲の時、奴僕の笞打たれるのを見て、義憤は烈火の樣な言葉となつて迸ばしつた。彼女の年寄の農民出の乳母は氣兼ねして、どうぞもつと低聲でお話しになつてと願つた。

「父は私の考へを助けてくれた。父は濶達な自由思想家で、私達は科學や旅行に關する書物を一緒に澤山讀んだ。社會學は私の心を奪つた。十六歲の時には、既にヴォルテマ、ルソー、デレロ等を多く讀み

フランス革命は暗記してゐた。私は赤ン坊の時からフランス語を話し、獨逸語は獨逸人の家庭教師から敎はつた。

「かういふ思想に燃やされてゐた私は、周圍に哀れな虐待されてゐる奴隷を見て、彼等の解放を熱望した。最初私は、自由は政治的急變なしに得られると思つた。革命的精神はまだ點火されてはゐなかつた當時は自由人の最初の大時代だつた。奴僕の解放は間近であつた。陪審制度の採用も迫つてゐた。此等の與へられんとする改革に、全ロシアは社會的衝動を感じた。喜ばしいたよりは私の胸を躍らせた。少年の熱情に充滿した私は自分の家の領地の近くに小さな學校を開いた。

「農民は下賤で無知で、既に獲てゐた貧弱な權利さへも理解しなかつた。彼等にはその穢い小屋と、少し許りの地面の事しか考へられなかつた。政府に就ては、平和なら金を、戰爭なら生命を、拂はなければならないものといふ丈しか知つてなかつた。解放の噂は、自由に對する彼等のどん底の希望に點火した。私の學校の廿人の農民も、他の數百萬の人々同樣、布告が握り潰されてゐるものと疑つて、度々地主に行つて、自由を要求した。遂に農民解放の宣言書が屆いた。」

これは一八六一年、カタヤが十七歳の時で、ロシアの自由思想家にとつて希望と活動との時代だつた然るに或點では、解放は多くの農民には、改善よりは改惡だつた。舊制度の下では奴僕は主人の領地を耕作するほかに、各自少し許りの土地を所有して、自分の家族の食料を造つてゐた。彼は自分の土地は自分の屬とまだ思つてゐたところ、さうでないことが分つた。

「農民は自由になつた。最早土地に繫がれないで、領主から解放された。彼は其所で、自由であるべく、餓死すべく、痩せこけた土地をほんの少し許り見せられた。彼は途方に暮れた。彼は前の所有地を奪られた自分を想像することが出來なかつた。幾世紀間

領地は「人間」幾人といはれて、説明され賣られてゐた程で、「人間」と坪とはいつも一緒だつた。だから農民は彼自身と彼の土地とは、一緒に自由にされることだと許り思つてゐた。彼らは鈍感ながら、漸く激怒して、痩せこけたポッチリの土地を貰ふ爲に、自分の所有地を去ることを拒絶した。「御主人樣、どうしたらまあ、ロシアの冬をおつ通して、私は小さな奴らを養つていかれませう。死ねつて仰しやるも同然です。」この叫は全ロシアに起つた。

「政府は各地方に「仲裁官」を任命して、農民を說得させやうとしたが駄目だつた。こんどは農民の小屋に軍隊を向けた。農民の家族は饑餓に瀕し、老人は醉つ拂つた兵士に亂打され、娘達は凌辱された。農民は益自棄になつた。すると笞刑が始まつた。我々の近くの村でも、農民等は去る事を拒絶したので、列を造らせられて、路に曳出され笞を加へられた。可哀相な無智な農民は、なほも死物狂で、自分達の權利と思つたものにしがみ付きつゝ、笞の下にどし〳〵殺された。此方法は全ロシアを通じて五年も行はれたが、流血に染み、根も性も盡き果てた農民はたう〳〵降參して了つた。

「私は私の小さな學校で、胸を裂かれる樣な話をきゝ、又、仲裁官であつた父を通して更に多くを聞いた。農民は日夜私の家に群つて來たが、笞で不具にされて運び込まれたのも澤山あつた。妻達はその眼の前で、夫達が殺されたことを、涙ながらに物語つた。被害者達は、文字通り平伏して私の父の膝にすがつて、「布告が誤謬だつた事が解るやうに、もう一度讀んで下さい。あの不思議な裁判所といふ所にいつて助けをよんで下さい」と嘆願した。父はかういふ會見の後は疲れきつてやつれて私の處に來た

「私は今、私の計畫が到底實效ないことが分つた。私は經濟的政治的の大變動の必要を感じた。然しまだ私は自由主義者で、改良のみを思ひ、革命は思はなかつた。指導を求め、進歩した人々の思想を知る爲に、私は十九歳の時、母姉と一緒に聖ペテルスブ

ルグに行つた。同じ車内に、シベリア勤務から歸りがけの蕭洒な青年貴族が入つて來たが、彼は私達に振りかゝつてゐる問題を、幾時間も私と議論した。彼の言葉は火の如く迫つた。私達は夢中になつて、大聲で話したので、乳母や母から、「低聲で」と賴まれた。この青年貴族こそピーター・クロポトキンだつたのである。

ペテログラードでカタヤは、貴族出身の大學生の醫師、辯護士、記者、小說家、詩人、科學者等の男女自由思想家の中央集團に投じた。女子の高等敎育は嚴禁されてゐたから、彼等は自然科學や政治學を女子の爲に開放することによつて、既に法律を破つてゐたのであつた。カタヤはどの組にも出席した。

母が病氣になつて、家に歸らなければならなくなつたので、カザリンを伴なうとしたが、彼女は肯かなかつた。彼女は生活費を續けるのは義務だと信じた。青年貴族は多くこの確信を有つてゐた。クロポトキンは「革命家の思出」中に、ネクラソフの詩から「奴隷につくられたるパンは苦し」を引いて、

「青年はかゝるパンを食することゝ、勞働者が全くの農民にせよ、現代産業組織の奴隷にせよ、奴隷的勞働によりて、彼らの父祖の上に、蓄積せられたる財寶を享樂することをまさしく峻拒した。

「カラコソフと其友人達が、多數の財產の所有者でありながら三四人で一室に住み、彼ら全體の一ケ月の費用に各人五弗以上を決して費すことなく、共同協會、共同工場（彼ら自ら此所で勞働した）等の設立に彼らの財產を拋げ出したといふ廉で、彼らが告發されたには、ロシア全體が驚愕した。五年後にはロシア青年——最も優秀な——の幾千が同一のことをしてゐた。一八六〇年から六五年にかけて殆あらゆる富豪の家庭に、舊い傳統を維持していかうとする父親と、自分達の理想に從つた實生活をしやうとする息子や娘との間に、苦い戰が續いてゐた。青年は軍務、帳場、商店を捨てゝ、大學の在る市邑に群つた。最も貴族的な家庭に育つた少女達が、一文な

しで都市に馳け出して、一心に職業をならつた……。千辛萬苦の末、彼らの多くは一身の自由をかち得た。今や彼らは、その自由を自分一個の歡喜の用とせずに、それを利用して、自分達を解放した智識を人民にもつて行かうとした。」

　カザリンはある貴族の家庭に、子供の家庭教師として住込む事にして母と妥協した。彼女は二年半勤めたが、厚遇されて人格は敬愛を得た。かういふ間にも彼女は州會の仕事を研究してゐた。

　彼女の父は彼女の歸宅を切りに促し、彼女の獨立と自給生活とを承認した。彼女は父の補助を得て、女子寄宿學校を開いたが、彼女の親戚等の傳手で、富豪の娘達が多く入學した。彼女は又父に小屋を建てゝ貰つて、無月謝で農民の子女を教へた。收入から生活費外に餘裕を生じた場合には、それを農民の爲に費し、牝牛だの馬だのを買つてやつた。

「私は今、人民に近づいていつた。私はあらゆる農夫が大昔から有つてゐる鞭たれ勞苦した記憶を語り初めた。表面にこそあらはれてゐざれ、彼らの心のとん底にある自由を憧憬する情を私は感じた。」

　三年後、廿五歳で彼女は教養のある善良な自由豁達の青年と結婚した。彼は地方會に活動し、農民には心からの興味を有つてゐた。彼は喜んでカザリンの事業を扶け、二人は共同銀行や、農業學校を農民の爲に設けた。

　然しカザリンはもう一層根本的な事をやる必要を感じた。更に一層の光明と補助者とを求める爲に、彼女はキエフにいつた。キエフでは彼女の妹の夫が病死に逢ひ、妹を慰藉した。丁度この時カザリンは幼な友達が幾人かで、ロシアの現狀が不滿でたまらないから、アメリカに行つて殖民地を造る考だから一緒に渡航しないかと誘つて來た。彼女は自分の幸福の爲に、周圍の不幸な農民をはなれる氣にはなれなかつたから、はつきり斷つた。

　キエフに一人の知人を有たなかつたカザリンは、「善良な人々」、主義の爲の新入者を造る方法を考へた揚句、大學生がゆく辨當屋に眼を付けた。

不幸なとなりびと（外一篇）

山澤榮子

癩病の乞食よ
おんみの何をおもへるやわれはしらず
たゞかなしき世びとゝ
うつる
不幸な御身よ
これはまことに僅かなれど
ひと日の糧のたしにもなればうれし
あかつきたる布にてつゝまれし御身の手に
渡すまづしきわかちもの
あゝ　みれば
喜ばしげな
おんみの顔
うつくしといはん
まことに御身はわが隣人なり
あまりにもわれはなさけうすし
うらむこともなくそこに
おゝ癩病の乞食よ
どうぞ我をゆるせ

きようだいのものゝこゝろ

あね上とありて
ひと日
われフリージアの花の描きたしと語りき
けふわが室ににほふは
それぞきゝて
やさしきあね上のおくられし一鉢ぞ
われ描かば
かならずやあね上がおこゝろも描くべし
なれけだかきフリージアの花よ
地上になされしきようだいのもののこゝろを
いと小さくはあれ
なれも祝せよ。

トラピスト修道院の晩鐘（下）

住谷悦

鐘なりぬ
萬(すべて)の燭火ゆらぐ
あかるむ
一炷(す)の煙
暗きところに
影はゐ群れて
榮の賜物(たまもの)にまみれつゝ
合せてうたふ

鐘なりぬ
あはせて歌ふ
祈禱(いのり)のこゑは
天堂に薫(かを)よふ

現なりや
夢なりや
否、否、あらず
夢と現との中なる眞(まこと)

鐘なりぬ、全能の天主
鐘なりぬ、御子キリスト
鐘なりぬ、母なるマリア
鐘なりぬ、鐘なりぬ……

（三木露風「眞心」より）

レオナルド・ダ・ヸィンチ(Leonardo Da Vinci)が弟子達に告げて「あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが音はどうとも聞かれる」と言つたとか。毎日、朝の六時と正午と夕の六時とには、その外祭壇の前に額づいて祈禱を捧げる時とにはきまつて高い鐘樓から響いてくる鐘の音が修道士達のそれ〴〵の胸に何を語ることであらう。

鐘の音よ。それは私にはなつかしいものゝ一つである。私の幼き夢を育くんだ故郷には國分寺と云ふ古いお寺がある。朝の六時と夕の六時とには必ず鐘樓から餘韻永く鐘の音が近くの村々へ響き渡つたのであつた。

少年の頃ほひ少し遊び過ごした夕べなど薄暗の中に累々と峙つ自分の家の裏の高い欅を目當にトボ〳〵田舍道を急ぐとき國分寺の鐘の音が響いてくると、只何とはなしに涙ぐまれた。そして家へ馳け込むやいきなり姉の膝に顔を押し當てゝ泣き出したこともあつた。Tears come from the heart and not from the brain とイタリーの詩人が歌つてゐるが私の幼き日の心は鐘の音に育くまれたのであつた。

――

赤々と落ちゆく夕日に、見はるかす波の穗がしらの榮えて、寂しくうるはしい津輕海峽に面して立つ時、僧院の鐘が鳴り渡ると、樣々な過去の思ひ出と共に私を遠い空の彼方につれてゆくのであつた。又幽玄な見知らぬあまつ國を微かながらも思ひ偲ばしむるのであつた。時が時だけ、所が所だけに私は一層の懷かしさと、莊嚴さと神秘さとを感じた。頑固な老人も、さえある學者も、戀に傷いて泣く若人も若しこの港の夕に立つてこの鐘の音を聞けば如何に心碎け、或は慰められ、そして心から祈禱を捧げることであらうよ。Strassburg の Mittags Glocke にはVox ego sum vita; voco vos; orate venite(われは生命の聲なり、われ汝を呼ばふ、來りていのれよ)と銘が記されてあるとかいふ。まこと鐘の音をきく時は神の前にいのりにゆく敬虔な心となる。

それは枯れ果てた心にも、疲れ衰へた身にも、不信心な人々にも新らしい生命と微妙な音樂によりて得る感激と、歡びに充ち溢れたる感謝と力とを與へるであらう。私は限りなく鐘の音を愛する。

私は朝早くより終課の鐘の鳴つて修道士達が曠野を歸り來る頃まで、スケッチ箱を肩に、三木露風の詩集「良心」を手にして僧院を中心に四方へ歩るき廻つた。歩るき疲れて樹陰に身を投げて、輕き風に綠葉の滑らかなるその奏樂を耳もとに聞きつゝ心奪らるゝが如くに寢入つたこともあつた。波の碎くる崖の上に腰を下ろして詩集に讀み耽る時もあつた。夜になるとタルシス老修士は必ずこのみすぼらしき學生の室を訪れて私の描いた數枚のスケッチを手にして「よく働らきました。よく働らきました」と勞らうて呉れた。親切な老修士を見る度毎に私は「良心」の詩を思ひ出すのであつた。

礁べは波を擧げぬ、その波は白く走りぬ
その波は崩るゝ中にてわめきぬ
かくてぞ變ることなし、今日も來てみる崖の端。
伴ひし道士は曰へり
「此處こそげに我所ぞ、此處にもましてよき所あらじかし」
羅馬より來れる彼は、儼ましげにそを眺めぬ。
彼は再來りとどろけり
「羅馬なる都に、われは青春時を過ごしぬ
されど我がためにこそは、此處こそ好けれ。
われは青春時を、羅馬なる都に過しぬ」と。
彼は三たび來て、そのことばを奪へり
「君知りたまふか、われは山を見て樂しと思はず
海見てあかず眺め暮す
こゝに來て見る崖の端、
いつも、いつも」と。

崖の端、島一羽めぐりたり。
「こゝの海邊の日本、羅馬より尚美し
いかで戀ふべき、彼の土地を
老樂の身には、たゞ大地のみありがたき」

「こゝの地はいと固し
我れはそをよく耕せり、是はこれ、神の物たり
我れはそをよく耕せり、さらば友よ
我れ安心して此處に憩ふならん」と。

今日も來て見る崖の端
彼は笑ひて語るなり、氣は嚴そかに波引きぬ
彼無言、我また無言、
日は赤々と影ふたつ。

遠く海を距てた異郷の地を神の與へ給ふた所として感謝しつゝ美しくも生きてゆく老修道士を心憎くさまで羨ましく思はぬわけにはゐかなかつた。タルシス老修士の語つて吳れたトラピストの話を掻いつまんで記してみたい。

一千百四十年に佛蘭西のノルマンディの偏境に在るトラップと云ふ土地にシトー修道會に屬してゐる一つの修道院は、ロトルーと云ふやんごとなき一人の貴族によつて創立せられたのであつた。其の地名がトラップ (Trappe) と呼ばれたので、それがため其の修道院の行者達をトラピスト (Trappist) と呼びならした。是がトラピストの名の起原であるとか。一千六百六十二年にアルマン・ジャン・ド・ランセと云ふ名を持つ僧侶がトラップ修道院の長となつた。

彼は靑春を、その頃の澤山の大諸侯と同じ樣に、日々、甘き歡樂と果てしない遊蕩に打ち過ごして居つた。併し彼は非常な強い性格の所有者であつて、一旦志を決すると途中で撓む樣なことのない人であつた。ある日、翻然と心に決する所があつたため、トラップ修道院に退隱してしまつた。そして慘憺た

る過ぐる月日の生活を神の前に懺悔すると同時に、修道院の綱紀を嚴重にし、再びこれをシトー初代の戒律に恢復しようと一心に勤めいそしんだのであつた。

此の時、反對者は彼方此方に起つてあくまで彼れの此の企てを妨げようとした。けれども彼は毫も屈する色は見えなかつた。燃ゆる様な堅忍不拔の氣象を振ひ起こして、千難萬苦を排しつゝ着々と自らの企てに歩を運んだのであつた。十五年の久しい年月の末に播かれたる種は生へた。そして獲り入れることが出來た。改良はいよ／＼完成し、完全き生活を送らうとする者は四方、八方から宛然賭の如く爭つて彼の許に趨り赴いた。これからトラピストの名が廣く世に顯はれて、その生活を聞く者は、皆非常なる感動を以て嘆美し、今日に至るまでその名が衰へてゐない。院長のド・ランセは終始、病魔に惱まされて居つたのであるけれど生れ乍らの勇壯な氣象は少しも所謂難行苦行を弛める様なことはしなかつた

千七百年に彼は七十五歳の年を數へて遂にトラピストの從來の慣例に從つて藁と灰との上に横つて永遠にこの地上の生命と別れを告げたのであつた。あの血醒い佛蘭西革命のとき、トラピストは佛國より放逐されねばならなかつた。

然し、こうした不幸な追放の運命に遇ふた人々がいつも一團を成して、或は瑞西に、或は伊太利に、獨逸に、更らに露西亞にまで避難し、流浪した。この流浪の旅を續けゆく間、到る處でその尊い戒律を遵奉して亂るゝ様子はなかつた。千八百十五年になつて革命が終り、再び平和に復したので、彼等は、懷かしき故郷トラップに歸り、以前の様な生活を其の場所に續けたのであつた。

其の後になつてトラピストは五大州に數多き、修道院を創立した。今日では男子の修道院（Trappist）は世界に六十ヶ所、女子の修道院（Trappistin）は三十六個を數へられると云ふことである。

トラピストは、ド・ランセの後裔であり、且つ弟

子である修道者として、シトー修道會に屬し、聖ベネディクトの戒律と、天主公教の教旨に從つて生活してゐるのだと云ふことである。

老修士の示して呉れた聖ベネディクトの戒律を開いてみれば、其の第一に曰く

心を盡し、靈を盡し、力を盡して主なる神を萬事に超えて愛すべし

と記るされてある。そして第二には

一切の人を己れの如く愛すべし

と掲げられてあつた。

人は永遠に己れの愛の絶對的對象を求めて止まない。人の子がこの世の光に照され、あの蒼い空を仰ぎ初めてから如何程絶對對象を求め喘ぎそして苦しみ悶えたことか。それを思へば修道士達がよし世の人より、その宗教が陶酔的であるとか、偶象の崇拜であるとか世と沒交渉で獨善的であるとか、舊き宗教であるとか兎角の批評はされても、確く絶對對象を得てその前に敬虔に額づいて平安な滿ち足りた生活を續けてゆくことは羨ましき限りである。併し乍ら、人の世を厭ひ、胸に惱みを懐いて修道院へ逃れた年若き修道者の中には、朝夕この戒律を口誦みつゝ己が實生活を顧る時そこに一種表白し得ぬ矛盾と物足らなさを感じ、その寂寞が積り積つて修院を逃れ出づることのあるのに對して吾々は十分の理解を持ちたいと思ふ。

修道者達は常にある一定の沈默の形式で、相互にMemento mori（記せよ、汝は死なざるべからざるを）の挨拶を交はす。そして謂へらく

麗かなる春の好日も時し來れば暮れて夜となり、旭日の光に最心地よげに微笑める花も終には萎縮て夜半の嵐に散り、春毎に翠床しき森林の王なる樫の木すらも何日かは枯れて朽ち果つべし。自然の大法は嚴然動かすべからず。人類も亦この數に免る能はず。吾人の祖先は前に逝けり。吾人も亦早晩其の後を追はざるべからず。人生は宛ながら海の波の押しつ押されつ岸に進みて消滅るに似

たり、一代又一代、順番にこの世を去らざるべからず。

彼等は斯うしてこの肉體の死を覺悟して泰然と死を迎へ、最後の床に臨んで不安と恐怖とに心を亂すことはない。この世に殘しゆく友人とは遠からず天國に於て再び相見え相語ることを確く信じて只管、沈默と勞働と祈禱との難行苦行を續けてゆく。

私は思ふ。修道院に生活するも、再びこの世へ逃るゝもそれがあくまで眞實であり眞劍であればよいと。平穩に見ゆる彼等の內生活も、Subiaco の洞窟の中に瞑想と祈禱と斷食の苦行を續けた St. Benedict の燃ゆるが如き苦闘があることゝ信ずる。彼は異常の興奮を感じ絕えず眼前に髣髴する幻影と其誘惑に苦しむ時、衣を脫いで洞窟の外なる荊棘の中に躍り入りその上を轉輾び廻り自ら其皮膚を傷け僅かに恐ろしい想像に打ち勝つことが出來たといふ。

プリュヌティエルが戲曲を解釋して“No struggle no drama.” と言つたとか。私は “No struggle, no life.” と言ひたい。相反した二つの力が相觸れ相打つストラグルがあつてこそ吾々の生活に深い意義がある。大瀑布の岩に激するが如き、大濤浩波の斷崖に碎くるが如き猛烈なる生の戰ひと戰の苦悶あるが故に人生に生甲斐がある。傳習に囚はれ權威に服從し、名譽と地位と財產の獲得のために利害の打算に日も是足らず尊き個性の進展を蹂躪し人としての存在を忘れた「事なかれ主義」の平凡な生活をする人々に何の意義があらうか。何事をするにも態度が浮薄で、一時的で强さもなく深さもなく煮え切らぬ不徹底な有樣に吾々はもう厭々してゐる。もつと深い大きい、徹底した生活が欲しい。そして一擧手一投足にも右顧し左眄するさもしい態度を捨てたい。

一體世の人々は求むる心が餘りに弱い。尋ねることが餘りに緩慢である。門を叩くことが何んと臆病で又其音が何んと微かなことであらう。要するに生溫い妥協的な生活を續けてゐて、强烈な眞實さが足らないのではないか。それ故に與へられず、逢ふこ

とを得ず、又門を開かるゝこともないのだと思ふ。

修道院につき私は尚書きたい澤山のことがある。二階には院長の趣味の爲に採集した種々の鑛物や地質學上の化石標本等珍らしい立派なのが陳列されてあるし、又修道者達の寢室の藁布團や、講堂の正面に安置されてある聖ベネディクトと聖ベルナルドの氣高くも美しき等身像のことや、聖廊下の兩壁に揭げられたクリスト一代の數多き聖畫のことや、豊かな菜園とポプラの林、トラピストバターの製造所、牛や羊の廣大な牧舍。其等のことに就ては又機會の許された時書きたいと思ふ。

函館の港町から一里程距てた「湯の川」には女の修道院「トラピスティン」がある。仰ぎ見らるゝ山の中腹に大きい赤い建物があり、その上に高く聳ゆる白い塔の上にきら〳〵と輝く十字架が見られる。其所へゆくには、釣鐘草の草間に咲きつゞく野の小路を、刈られた麥の畑の間を、約一時間も辿らねばならない。併し、こゝは「男禁制」の尼寺である。私は開かれたる門の傍に立つて、僧院の床しき窓より漏れ響く胸を唆らるゝ様な、誰でもきけば自然に涙のあふれ落つる様な讃美歌の合唱に耳を傾けるのみであつた。若し私が旅に行き暮れて、道に迷ひ、此門の前に行き倒れになつたとしたなら、それでも確き掟に從つて死にゆく生命をそのまゝ朝露に曝らして置くだらうかなどゝあてどもなき空想に耽りつゝ鐘樓の鐘を後に、元來た道を引き返さねばならなかつた。この「湯の川の天使園」に就ては、別に誰か女の方々の筆を煩はさねばならない。——

あゝさなり旅に果つべきわれなれば遍路といふ
　もなつかしき名ぞ

といふ私の友人の歌を思ひ出し、しみじみ味ひつゝ洋筆を捨つる。(をはり)

(一九二一、二、九)

ドルカス

使徒行傳九章三六―四三

村岸榮子譯出

ドルカス寡夫人が生活の傍ら非常な働きをしたヨッパはごく古い所である。聖書時代を通じて、それが埃及とカルメル山との連絡を保つ唯一つの地中海岸の碇泊港であり、且つエルサレムの海港であつたとの二つの理由で重きをなした所であつた。かのソロモン宮殿の建築材はレバノン山よりヨッパへ流材として出され、更に此處よりエルサレムへと陸路三十五哩を輸送されたのであつた。それから亦ヨナがニネベへ行くべき神命に背いて逃亡した時に出航したのもこのヨッパからであつた。この町は數代に亙つてその呼名に於てすらも餘り激しい變化を見せなかつた。ヨシュアの頃の Japho が新約書時代には Joppa であり現今は Jappa なのである。

さてこのヨッパにタビタ別名ドルカスなる女が棲居して居た。タビタとはヘブル語で優雅、艶麗を表現する語で、ドルカスとは希臘語で羚羊の意味に相當する言辭であるから、この二つの名は一つに結び附いてつまり美と雅とを表す物になる譯である。但し是が彼女の外觀上の容姿に當てはまるや否や證言は能きぬけれども、彼女の品性そのものを表示する上に於いては眞實であつた。希臘の古聖の祈り「神汝をして中に美しからしめんことを」が彼女の場合

に於て實現せられたとも云へやう。

さて我々は彼女の容姿に就て多くを知らぬと等しく、或は彼女が既婚か未婚か老年かそれとも年若いのか、さては富むか貧しいかさういつた個人的の經歴を知る事はごく少い。只彼女が相當に地位のよい結婚後僅かにして寡婦となり何等みよりのない女だといふ事丈は確かであつた。ヨッパで善き業を始めて人々の胸に上つて來た彼女は、只是丈のドルカスであつた。

彼女はたつた一人廣い世界に取殘された年若い寡婦人で、基督教の信仰に生き常に「主よ、私に何をなせとお命じになるのですか」との問を出さねば止まぬ胸を抱いたユダヤ人の女であつた。

然しこのドルカスにはなし得ない色々の事があつた、ピリポの娘等の樣な女豫言者でない以上福音の宣傳旅行に出樣とは思へなかつた、否彼女は少年少女達に敎ふる事にさへ逡巡した。かういふ方面には彼女の才能は缺けて居た。然らば彼女が他人のねぎらひのために掘り得べき井戸乃至は彼女の愛を通して救主の愛を表象し得べき何等かの出口を穿つ事は不可能だつたろうか。

「主よ、私に何をなせとお命じなのですか。」私達はドルカスが女弟子で同時に初學者であるのを知つてゐる。しかも是が初學者の熱心熱誠なる問である上は、その答が來らぬ譯はない。ドルカスが主のために奉仕するに當つて說敎壇もペンも乃至は敎室も役には立たなかつたが、主は「往きて福音を宣傳せよ」の語に加ふるに「我が裸なりしに着せたり」「いと小さき者の一人になしゝは我になしゝなり」を以てし給ふた。

一日使徒ペテロがヨッパに在て、宣べ傳へたイエスの審判の日の魅惑に富む數言が、ドルカスの胸に離れ難き迄深く食ひ入つて、軈て後に咲き出でた奉仕の花の種子となつたのであつた。

「主よ、私に何をなせとお命じなのですか。」

「お手の中にあるものは何なのでございます。」

「一本の杖」

然う、ごく／＼小さい針の形を取つた杖。然しその背後にイエスの精心と愛の精心とがある時には、モーセの手に依て奇蹟を行つたあの偉大な杖となる所の物であつた。愛こそは誠に基督者の奉仕の先驅者である。「主よ、何をなせとお命じなのですか。」と私達も問ひ續けるなら、必ず「歩むべき道は是、是に從へ」との聲が聽かれる筈である。

ドルカスの業はごく低い、見榮えのしない仕方で始まつた。さきに言つた樣な沿岸の港町には（今日なほ多く見るが如くに）孤兒や寡婦が澤山居つた。ドルカスは基督者の集合の中にも是を見た。そして今や彼女は井戸を掘り出すべき好機會を發見するに到つたのである。使徒行傳の記者は「よき業と施濟とをなせり」と稱へて居り、しかも光輝ある辭であるけれども、ドルカスは施濟をする丈では飽き足らず、もつと人格的奉仕、換言すれば時間も手段も獻げて物質的贈物と共に心からの同情を惜しまなかつたのである。

故に私達はドルカスを目して、基督教會の最初の巡回訪問者と見做して憚らない。その訪問が救與の爲であつた事は無論言ふ迄もない。

かういふ貧民救濟法は別段新生事ではなく、既にユダヤの宗教に依て基督教會の内に實行せられて居たが、更にイエスの宗教に依て慈善の精神が新たな刺戟と力とを受けたので、茲にその最も先なる表彰の一として私達はドルカスの行爲を見るのである。が彼の女は素より大富豪ではなかつた。そして與ふる財貨や深切な慰め等が貧民等に喜んで受け入れられ乍ら、しかも何等見るべき效果が擧がらず、恰も砂丘を犂きかへす有樣であつた。

「一心に稼いだ僅かな貯へ
それで私が施しするに
使つて使ひ果した揚句
乞食は又もや門に立つ
やつぱり探へて、ひもじいと」

ドルカスの經驗もその通りで、金子を與へた後に訪ね見れば、子女は依然着る物もなく家は貧の極みにある有樣であつた。で彼女はこれから新しい事を思ひ附いた。寡婦なる母親達のみならず同時にその子供達にも盡力せねばならないと。そこで彼女はまづ孤兒達のためにと家にあつて、その事業に着手し始めた。茲に於て「いと小さき杖」はイエス、キリストの愛を表示すべき「神聖なる杖」と化した。

彼女は數多くの着物を縫ひ終ると更に自身で貧民の許へ携へ行き、手づから子供達に着せてやるのであつた。彼女のなしたよき示しは軈て隣人の共鳴をうけ、數多のクリスチャン婦人連がドルカスの家に來て、共にこの仕事に助力するに到つた。かくして基督敎會の歷史における最初のしかも行き届いたドルカス協會がヨッパに開かれたのであつた。

所がこの樣な慈善行爲に忙しい最中に、全く思ひ設けぬ事が起つて來た。氣味惡い疾病の暗影がドルカスの家を包み、氷の樣な死の手が愛に燃ゆる基督者の胸を掴むだ。傳ふる所によれば彼女の死は餘りに突發的で、誰も信者の團體の中で是認する者がなかつたといふ。それは餘りに驚駭すべき不時の災禍であつた。死は決して團體に取つて最も貴重な最も有益なその生命を要求する權利はないのだ。もう一つには彼女はまだ比較的に若手な寡婦であつた事と、彼女がなした多くの善行との爲に、信者達は今一度彼女の生命の與へらるゝ樣に熱望した。その希望とそれを起さしめた信仰とは彼等を驅つて一方ペテロの許へ急使を走らせる事と共に、ドルカスの屍體は直ちに埋葬をせずに洗つた儘で高樓へ置かしめた。

この時使徒はリディヤの海岸から九哩も深く奥に入つてゐたが、既に知己であつたドルカスの許へ直に來るやうにとの使者の懇願に動かされて、直刻ヨッパへ向つた。ドルカスの家は悲嘆の眞最中であつた。室は彼女と協力した寡婦達と、茲で彼女に救はれた寡婦達とで充滿して居た。事の意外さにペテロはまづ口を開いて、

「儂を呼んだ用向は何事か」と問はざるを得なかつた。

しかもその返答は言葉が與ふる説明でもなく、啜泣でもなく、あとからあとへと續く寡婦達の證言であつた。

「御らん下さい。この着物はあの方が私の息子に御自分で縫つて下さいましたのです。」

「この着物は私がひどく貧乏してゐた折にお手づから持つて來て下すつた物なのです。」

「これは――　これは――」

やがてその中の一人が言つた。

「どうぞあなた樣、お助け下さい。あの方は私共の指導者で、エス樣の御精神の生れ代りでいらつしやいます。」

實にそれはドルカスの價値と業とに對する驚くべき立證と貢獻との集會であつた。更に驚くべき事件が續いて起つた。それは神が孤兒と寡婦との叫びを聽き給ふて、この光榮あるイエスキリストの躰に生命を與へて悲しみを喜びに變じ、この極めて卑しいそして實際的なクリスチャン奉仕の偉大さを印附け給ふた事であつた。

その日は勿論ヨッパにある信者やその團體の中のみならず、貧民の間にも大なる喜びの日であらねばならなかつた。私達は是に依て多くの者が主を信じた事を讀んでも敢て驚くに足りない。信者達の信仰が確了せられ増加せられた一方に、外なる者が數多敎會に導かれた。

蓋しこの時ヨッパに行はれた奇蹟はドルカスの再生があつたのみに止らなかつた。今一つといふのは「ペテロ皮工シモンの家にありて日久しくヨッパに留まれり。」の一句である。シモンペテロの如き最も嚴格なる猶太人が皮工と共に留まつたといふ事である。當時死獸の皮を以て貿買したる皮工の職はジューの眼からは極端に嫌惡され、萬一良人が皮工になつた場合には夫のみの理由で妻に離婚の權利が與へられて居た程であつた。にも拘らず最も峻嚴なジュ

ーの好典型なるペテロその人が皮工シモンの家に滞在したのである。この第二の奇蹟はイエスの宗教の果實であり、今日の立場より是を觀ずるに或意味に於てむしろドルカスの生理的復活よりも更に大いなる奇蹟とも目さるゝのである。

ヨツパのドルカスは決して離すべからざる婦人の權利、善をなすの權利を表示した先驅者である（玆には論議の紛爭も反對の語聲もない。）早く良人を奪はれ只孤獨で人生の苦鬪の戰線に送られたドルカスにとつて、神の攝理を呪ひ、利己な自己中心や豪奢な歡樂や快樂に耽溺するはいと容易な道であつたに拘らず、彼女はよき方を選んで他人とその窮乏を知つてそれを補ふために一身を獻げた。されば今日ある全世界のドルカス協會は彼女の祝すべき記憶を忘れないのである。

私達には說敎をしたり集會を指導したり新聞に寄書したりする事は能ないかもしれない。然も私達には誰かを助ける事が能る。貧民、また助けを要する者を顧みる者は祝される。主もまた彼を艱難の日に顧み給ふから、私達は私達がした事またしなかつた事の量に從つて審かれるのであるから。

今日なほドルカス型の婦人即ちその人の基督敎が愛に依つて働く信仰の中に啓示さるゝ婦人には、いつも進むべき道が開かれて居るのである。よき言葉を口にする者は多いけれどよき業に到つては全然空虛で不生產的である、然し乍らドルカスは偉大なる實行者で決して大饒舌家でなかつた。」とのマシユーアーノルドの言辭は眞實であつた。「よき業と施濟とをなせり」とは凡ゆる善良なる信者が貪り欲する所の碑文なのである。

「あなたの生を損失に依て評價なさい
決して獲得によらないで
あなたの生を注ぎ出した葡萄酒に依て評價なさい
決して飲むだ葡萄酒によらないで。
何故なら愛の力は愛の犧牲の中に樹つ故に
何故なら一番多く苦しむ者が一番多く與へる故に。」

オフィスの窓から

Kより

Yさんへ

春光また來つて人心をそゝのかす頃となりました閑散な午後のオフィスの机の上に頬杖ついて靜かな想に耽つてゐます。過去數年、希望と憧憬と不安に若い胸を躍らした卒業前後の氣分をそゞろ思ひ起すことが出來ます。軟かい土床の中でスク／＼と伸びた草の芽のやうな美しい思想と抱負、それが現實の風にどのやうに撓められ歪められて行くか、それを今、かつての私と同じ想ひで社會に出やうとする若い貴孃に話す事は惜しい殘酷なやうな氣もします。

社會の要求に應ずるといふ意味のみでなく、生活のためばかりでなく、婦人自ら目覺めてあらゆる方面に職業の範圍を廣めて行く、その事に就ては此四五年來、確乎たる意見を持つ人の多くなつた明白な事實を認めて、今玆にとやかく考へる必要はないと思ひますが、とにかく今新に社會に出やうといふ貴孃達は、私共が此世間に抛り出された時代より多く實業方面の事務などに對する準備や意見の出來て居る事と思ひます。社會が小學校の卒業生の一人すら徒らに遊ばせては置かない世の中になつて來たのですものね。

然し私の狹い經驗から推しても、如何に學校時代の理想が苦勞知らずの美しいものであつたかを思はないわけには行きません。特に語學の力を得て、貴孃のお望みのやうにそれを以て職業を選ばうとする人々が先づタイピストなりコレスポンデンド或はセクレタレーとして或商館又は會社に這入つたとする……………第一に自分が多くの男子と同等の位置に置かれ、同等な能力を要求されてゐる事を一番初めにウンと自覺せねばならないでせう、次にそれらの人達が貴孃の履歷と姿とを見て、どんなに好奇に滿ちた

眼で、その能力を試し批評しやうとしてゐるかを意識なさるでせう。まして同じ置位に女の同僚のないやうな所へ行くと、随分取りつく島のないやうな冷たい空氣に圍まれる事もあるものです。それは一面に於て薬です。自分の一擧一動が人の好奇心を引くに値するものである事を思ひ、充分そのために思慮深くし、努めて沈着と度胸とが必要です。又、學校出たての故を以て自分の無經驗のために決しておびやかされてはならない事です。無經驗、不慣れは初めから素直にさらけ出し、狼狽たりピク〳〵したりして却つて問ふべき事を問はないで見にくい間違などをしないやうにしなければならないと思ひます。謙遜と溫和とで己を包み、而も一刻も早く全力を盡して社內或は商館內の空氣、規則及び事務の取方を呑み込むに努める事です。單なるタイピストとして勤める方は割合に容易に勤めを會得出來ますけれどその書式などに於ても店々に依つてあながち書物で學んだ通りではないのですから、些細の事でも二度は聞かぬ覺悟で、念のため一應は書式をたしかめてからする方が安全です。初めのうちは一つ物を尋ねるのでも五分十分はどうしやうなんて頭をくさらせるものですが、全く物を知らないできくのと、念のためにきくのとの相違は人にもわかる事ですから、こんな事を知らないかと思はれるのが氣遣はしさに無斷でするやうな事は避けた方が利口です。勿論一つの事をきくにも言葉叮嚀に而も簡潔にありたいものです。比較的小い店、會社等の秘書役として勤める時は、種々小いだけに個有な常例があつて內容を知るのに大分骨が折れます。社長又は支配人の秘書役などゝ云ふ仕事は、只命ぜられるまゝに忠實にやつて行けばよいのですが、命ずる者の氣質をのみ込み、機敏に頭を働かせるとしないとはその信用上に大變な差があります。秘書といふ役には信用が第一です。無口で思慮深い事がこの役の信用を得る資格のやうに存じます。何事にも落着きと柔和と謙遜とは一番必要な事です。沈着な態度の中に最も忙しく

鋭敏に頭を働かせて物事を見拔く力がなくてはなりません。

はじめの中は執務に起る不審は凡て自分のメモにでも書き止めて置いて、お晝の休憩時間にでも纏めて簡單にきく方がよろしいでせう。一と通り周圍の事や自分の職務の圏内が解つたら、今度は自分の圏り及び執務の手順を最も自分に便利なやうに整頓し一つのシステムを立てゝ置く事です。整頓は落着きを得る第一の原因である事を考へ、常に周圍にある物品の整頓に努めると同時に、頭の中の整頓にも心懸けて居ねばなりません。整頓と落着きがどれだけ人に氣品を與へ、繁忙から救ふてくれるかは誰しも當つて見てわかる事です。

氣がクシャ〱して居る、机の上が取り散かつて居る、そこへドャ〱と原稿や手紙がまわされる、かういふ時必ず仕事に氣が顛倒する。慣れない時は特にカッとのぼせて了ふ……、結果は必ず間違の多いものであります。

「潔白、淳撲、堅實の精神の人は事務繁劇の爲にその精神を錯亂せらるゝことなし」とトマス・アケムピスも云つてゐる通り、常にどのやうな繁忙にもおびやかされ殺倒せられないために、いつも澄みきつた水のやうな潔白な而も打てば響くやうな緊張した自己を握つて居らねばならないと思ひます。時にはあれも是もとたて續けにベラ〱と幾多の用務を一時に命ぜられる時があります。そういふ時には、ウンと深い呼吸の一つ二つもして、何喰はぬ顏で冷然とハア〱と受け流しつゝ、紙切れか何かに手早く機械的に用事を書きつけて、成るべく頭の重荷を助ける事です。行ふ時は必ず一つ一つ讀み返して、片をつけ順序を追ふて處理すべきです。一日の終りには人に云ひつけられなくとも、必ず其日行ふた事、例へば「誰宛手紙、何行電報、何々整理濟」とか自分のメモにでも書き記して置く事は特に怠つてはならない事と思ひます。秘書のやうな役の人々は特にかういふ緻密な事にも用意周到でありたいもので

す。「あすこから返事が來ましたかね」とか「何處々々へは手紙を出しましたね」とか云はれた時「サア」などゝ間の抜けた返事をしないでもすむわけです。翌日出勤した時、圍りの整理が出來たら一應前日のメモに目を通し靜かにその日の執務の準備をしておく事です。

貴嬢のやうに多少とも中等以上の教育をうけて、語學にも國語にも目の明かになつてゐる者が、就職當時一寸まごつく事は、上役から出された原稿や何かに間違ひや不審の點を發見する時です。スペリングなどの間違ひなら成るべく氣付かぬ風にして正しておく必要もありますが、解りきつた文法の間違ひや、數字の誤りは、自分はたゞ原稿をタイプライトすればよいのであるからといふ文字通りの職務に立脚して責任を逃れやうとして却つて無能を試されるやうなハメになつたり、また由來學校仕込のグラムマーからこれは怪しいと一人合點して、正しておくとそれは商業上常用語であつたりして、何となく潛越の愧らひに顔を赤らめねばならないやうな事がよくあるものです。かういふ時に相手をきめつけるやうな態度や口吻が微塵もあつてはならない事です何處迄も敎へを乞ふといふ態度で念のために指摘して再考を乞ふやうにすればよいと思ひます。其人が訂正しやうとしまいと要は後になつて此間違ひを氣付いてゐて念をおした事を相手が記憶してゐさへすれば、自分の責任は明白なわけです。之は手紙などの問題のみでなく、事物の處理に於ける意見の相違などに於ても必ず不審と思ふ點は一應相手の氣をその點に集めておく事は利口な、親切な方法です。

「さう思つたのですけれど……」と云ふ言葉は云はねばならぬ方でも殘念であり、きく方にも云ひわけらしく手頼りない非事務的な言葉のやうに思はれます。又こんな事位記憶へて居られると思ふても、一々書き留めておく方が事務的です。その方が始終頭に餘裕がありますし、また書いた物の方がたしかな證據ですから。事務的の所は何處迄も事務的に柔し

い中にテキパキとしなければなりません。

言葉遣ひは給仕にも社長にも上役にもすべて同様に叮嚀である事は私の理想です。そして就職當時も一年二年後の馴れた時も、その言語と態度とを變えないといふ事は奥床しい事と思はれます。初めに特に憶病でない代り馴れても決してリミットを超えて打解けぬ……………といふのは、周りの人々に適宜の遠慮と尊敬の念とを失はせないものだといふ事は經驗してゐます。それには唯言語動作ばかりでなく、自由な休憩時間などにする讀みものにも充分注意を拂はねばならない事です。煩雜無味な事務の間には、肩のこらないものを讀みたくならないでもありませんが、それは餘程注意し吟味しなければならないと存じます。常に近づき度い〱と思つて居る人達は得て讀物などをきつかけに話の糸を繰りたがるものですから、出來得る限り高尚なもの、宗敎的なものを讀み、言はず語らずのうちに、その人の趣味趣好が奈邊にあるかを想はせ、自然のうちに人格の姿がクッキリと浮ぶやうにしなければならないと思ひます。上役の方はよく身の上の話、家族の有無などを親切さうにきゝたがり、同僚はよく趣味の話を持ち出して近づきたがります。いづれも答として禮を失せぬ程度、相手が一歩進めば、こちらも一歩控え目に進むと云つた態度は無難でせう。それでも話の下卑て來るやうな場合が萬一ある時は、怒りと不快とを隠してその場に堪えるよりは、怒りを表す前に、臆面なく平然と柔しく而も大膽に、その場を立つのがよいと思ひます。

「柳に風」は古い言ひ草ですが、どのやうな言葉、態度をも笑ひで受ける度量は貴いものです。然し編を曲解せられぬやう、態度はどこ迄も伸々と自己の潔白が欲するまゝに自由に行ふて、却つて氣高い調和がとれるやうに思ひます。ダレ易い空氣の中にあつては却つて潔癖で笑はれる位であつてよいと思ひます。

事務に入る人々が始めから特に確乎と心を締めて

か〻らねばならない事は、今後の婦人にとつて職業の範圍を擴張して行く事が、如何に有利であるとしても、それは婦人自らの力の自覺のために必要な方法であり、婦人の置位向上の一階段であつて、決して事務そのものを本分とし、至上の目的と思ひ違へぬ事でせう。事務に沒頭し唯それのみ完全に成し遂げ、無難に過ぎれば生活の意義が充分にあるやうに思ひ込むのは、餘りに物足りない事です。そういふ人に限つて上役や社長の言葉が執務上の權限以上に力を持つやうになり、萬能になるのです。私の云ひ分は或種の側からは或は危險視されるかも知れませんが、働く女子の側から考へて、それを生命とし、それに全力を傾け盡すのは少し理に合はない氣がします。馬鹿でない以上、相應な才能を持ち、資格を具備した者が適當な位置におかれて今日の事務を充分に行ふて行く事は當り前の事でせう。只、望む所は一歩進んで、高尚な女子の人格が多くの人々の間にあつて、女子特有な天賦の柔和、緻密な才能と相待つて、圍りに感化を及ぼし、最後の勝利を一般婦人の自覺と置位とに來らしめやう爲に熱心な希望と自信とを持つて働きたいものです。事務によつて人格が左右せられぬやう、事務は何所迄も一つのミーンスであり、人格の流れがそれを顯す底の考へでありたいものです。與へられた職務は餘念なく落度なくなし遂げられねばならないが、其後には洋々として動きない大洋のやうな重々しい人格と力強い緊張した個性とが、何者のいたづらをも容さないといふやうに控えてゐる事を、或程度まで明白に表して日々の事務を執りたいものです。

是れが爲にはどうしても確乎たる宗敎の信仰を有つ事が必要です。また婦人同志のムーブメント、集會などに加入する事、之等の高尚なものに向つて生活を統一し、生命の對象を定めて置く事が必要です學校時代には餘り敎會へも出入しなかつたやうな人は、先づ社會に出やうとする前に此種の方面に避難所、安み所を求めて、生活の喜悅と慰めとを斯る方

面にのみ經驗するやうにされたいものです。職業婦人の生活方針の梶が一勢に斯ういふ方に向いて來たら、婦人故にうけつゝある社會の壓迫や誘惑は後を絕つ筈だと思ひます。私のつまらない經驗から云つても、先づお晝の休み時間には、笑はれても何でも喜んで宗教の本でも繙いて讀む、時には社長や上役の人が厚意でか好奇心からか又は他に意味あつてか夕の時間以後迄も引とめて夕食などに誘ふとする時がないでもありません。そんな時に「今晩は何々の婦人會に是非出なければなりませんから………」「今日は祈禱會ですから………」とそれが無上の喜び樂しみである事を態度にも言葉にも表して、ニコヤカに辭して歸る、斯ういふ事が四五度も重なれば大抵の人は小首を傾けて考へます。そして其女の不斷の喜悅と快活な生命との源が何邊にあるか解つてくれる筈です。

Yさん、教育事業にしろ、ビジネスにしろ、何といつても結局は人格の問題でせうね。私は到々此くだく／＼しい話を此處迄せり上げて來なくては滿足出來なくなりました。

最後につまらない事ですけれど服裝の事をつけ加へます。どんなでも境遇によりニートでさへあれば結構でございますけれど、同じ自由な境遇にあるものでしたら、あまり品質のよくないものを度々變へて着用して人の目を惹くやうな事をさけて、垢のつかない程度に上等のものを氣品よく如何にもその人の趣味を忍ばせるやうに、いつも同じやうに着て特色を持つた服裝がしたいと思ひます。

何事も當つて砕けろです。勇氣を持つて試みて御覧なさい。社會が敎へてくれませうから。然し取捨に迷はないやうになさい。どのやうな逆風にも飛ばされないやうに搖がない枯れない葡萄の幹に連がつていらつしやい。軟かい新芽を持つた貴孃に特におすゝめいたします。

夕陽が早や窓のカーテンの後に沒します。

若い人々の前途のために祈つてゐます。（大正十、二、二〇）

東京青年會報告（神田北神保町十四）

學生部報告

岡崎小文

一月十日より各聖書の組を始めました。

一月十五日　基督教信者教師會を催しました。ミスレーガン「來りて見よ我に倣へ」と言ふ題で話され　ミスフエリスのダンスを見せて頂き、二三の遊戲を共にし、茶菓の後散會しました。來會者十八名。

一月十六日　第三日曜日午後讃美禮拜を催しました　二階堂眞壽先生「獻物」と言ふ題で話され、安藤坂寄宿生有志の合唱があり、四時散會しました。來會者約七十名。

一月廿二日　午後一時半より東京音樂學校生徒の新年會を催しました。ミスダニング「冒險をすること」と言ふ題で話され、折柄開催中の盲人會に出席し、有志の方々「主よ御許に近づかん」を合唱され、再びもとの場所に歸り茶菓を頂き、共に樂しく遊びまして四時散會致しました。

二月十二日　午後一時半より文學講演會開催。岡田哲藏先生「現代英詩への接近」と言ふ題で御講演がありました。

教育部報告

酒井愛子

□タイプライター科　タイプの技倆の外オフイスに於ける何等の觀念なくしてタイピスト顔して働きつゝあるをなげかはしきことゝ痛切に感じられ、ミスレーシーがオフイストレイニングなるものを一週二回、火曜日（午後一時半より）水曜日（午前十一時より）三十分づゝ敎へ下さるを一同喜び居れり。

□編物會　毎木曜日、午前十時より正午迄。午後四時半より六時迄。先生ミスアームストロング。材料隨意。月謝五十錢。

□英語の組時間割　朝の組十時より十二時迄、午後の組三時半より四時半迄、夜の組六時より七時迄。

家庭部報告

坂本花代

△二月十二日午後一時半より母と子供との會を催す始め一時間許りは野邊地天馬先生の御話、次にはミ

スフエリスが家庭的の兒童室內遊戲や團體遊戲をお致へ下さいました。猶お茶の代りに冬向の温ひ野菜スープを二三種差上げ又其の製法を印刷して御渡しました。非常の好評でした。

△二月十九日家庭親睦會午後六時より、會費壹圓、餘興としては音樂遊戲が御座いますが特にこの度は米國建國時代の服裝で米國の御方々がミニュエットと言ふ上品なダンスをして下さいます。すでに百名の方々の出席が確定して居ります。

△二月二十五日金曜日午後一時より一戸先生のお雛祭り料理の實習會が御座います。多分會費は五拾錢位です。

△西洋裁縫科。月木午前九時より午後四時迄先生は桑田梅子姉並に內外人二三名の助力があります。

△本年度よりは家庭部の組織も改め、出來るだけ皆樣の御要求を滿し、眞に益のあるものに致したいと思ひ、つとめて居ります。この部を家庭、社會、及文學美術研究の三部分に分け各々委員數名を置くことになりました。皆樣方の御要求を御遠慮なく御もらし下さい。そして青年會をして眞に力のある會員の會に致さうではありませんか。

商工部報告

鈴木トミヱ

一月五日。湧泉クラブ小集。
新年懇談會を開く。來會者十名。常に多忙なる方々も今日は羽根つき、歌留多取りなどゝ談笑裏に時を過す。五時散會。

一月十七日。青鳥(ブリユーバードクラブ)會相談會。
勸業銀行及勸業債券月報社員中少數有志者によりて「眞に生る」と云ふ目的の下に成立さる。種々なる困難の中、雄(いさま)しく萌え出でし軟い、若芽の成長に皆樣の御祈を乞ふ。

一月廿二日。湧泉會親睦會。
二時半より一般[illegible]務報告ありて後親睦會に移る、ミスレーシーも出席され一層の興を添へらる。六時夕食を共にし一先づ散會し希望者のみにて懇談會を開く。お互に感想感話を語り合ひ近頃になきシンミリ

とせし會合なりき。九時散會出席者廿名。

一月廿九日。有職婦人講演會
午後六時より開催す。講師は二階堂眞壽先生。「吾々が世を渡るのに一番に大切な、なければならないもの、而して一番よくない。なくてよいものは」とお話を始められ即ち「自己に生る」事といふ意味深い言葉で終を告げられたり。出席者三十名。考ふる事の多くを播かれて散會す。

二月五日。有職婦人クラブ組織相談會。
創設の困難は覺悟しつゝも尙止み難き思に集ひて相談す。來會者十二名出務商店は高田商會野澤組三越フアーイスト社高田商會銀座捌賣部等なり。

二月八日。商工部委員會
午後六時半より新年よりお願せし新委員にも出席を乞ひて開催す。

二月末日に於て有職婦人大會を開き、河井先生に御講演を乞ふ事。

三月上旬に三越婦人店員の招待會を開くこと。

三月下旬に學術講演會を開く事。

等を議決す。尙講習其他は次の委員會迄に調査して再度相談する事とす。

一般報告

會員親睦會。私共の常に心に掛けて居ります會員諸姉の親睦を計る爲め今度アルハベット會と云ふ集をつくりました。

ABCの順に極小數の方々をお招きして粗茶を頂きながら樂しく呑氣に過します此のお集りを、始めて去一月廿七日木曜日午後二時より四時頃迄催しました。お名前はよく存じて居りましてお顏を少しも存じ上げませんでした方々にもお目にかゝり又久しく會館へおみえになりませんでした姉妹方の御元氣な御樣子をも拜し、お互にお話とり交し等して眞にうちとけた今迄にない親しいお集りで御座いました。出席者十四名。

寄宿舍。一月十五日より會長志立タキ子姉の御邸內の一部を御開放下され、眞に家庭的の寄宿舍が出來

まして感謝致して居ります。

昨年のクリスマス獻金及其他支那飢饉の爲の寄附金合計三百圓也を過日支那へ送金致しました。

一月中左の諸集會が會館内で催されました。

日本基督教牧師親睦會。東京ウーマンスクラブ。世界平和及國際聯盟研究會。女子青年會京濱幹事會。都下基督教諸團體働人新年會。盲人招待會。日本基督教會長老會委員會。

△一月の來館者數

諸組生徒數　千五百二十七人。來客者數　六十五人

他集會者數　百六人。

合計　千六百九十八人

■個人消息

○福井喜久子姉　過日平澤氏と結婚さる。

○福井春子姉　妹君なる同姉も石川氏と結婚さる。

兩姉新御家庭の上に祝福あらんことを

○秋元俊子姉　久しく御病氣なりし父君去る十二月逝去されし由

○外村梅子姉　昨年末類焼の難にあはれし由御同情に堪えず。

横濱女子青年會（本町通り）

○宗教部

一午前禮拜、毎日十一時より三十分出席者廿名餘

一夕の禮拜、毎夜々學前。出席者八十五名

一聖書の組、七組

一靈交會、毎日曜日午後三時。出席者五十名内外新に生きて主に仕へんとする姉妹に導きと糧とを充分に與へられ感謝す。

○教育部

一、九年十二月廿二日夜第二學期終業式を兼ねクリスマス祝會開催。來會者百五十名餘。

一、十年一月十日午後四時第三學期始業式執行。出席者四十名餘。

一、十年一月十一日授業開始。

一、今學期入學者。三十八名、計三百十名。

○移民部

一、一月十八日日比忠子氏縣廳より渡航者講習

託を任命さる。
一、十二月より二月始に至る迄廿度の出帆あり。其都度船を訪問し、船中の注意、米國に於る風俗習慣の一般を語る。
一、渡航婦人心得千部。紹介狀四百四十配布。
一、旅館訪問數度、殊に朝鮮婦人を。

○クラブ
一、婦人クラブ。當市にある知識階級の夫人方の要求により同クラブの設立ありしは既に報告せし所なり。二月九日第三回例會を開きメンデルソン夫人の有益なる御話、ミスアレンの編物教授等ありたり。毎月例會を第一水曜日と定め次回はメンデルソン夫人の御宅訪問となし西洋家庭の研究をなす計畫なり。毎回出席者十二三名。
一、BGクラブ。二月十八日親睦會開催の筈。

○親睦の夜。今後毎土曜日の夜を會員との親睦の夜にあて、自由に面白く遊戲體操などなし、親しく談話する事に定めたり。

（横濱氏報）

大阪女子青年會報告

（北區天滿橋筋）

○教育部　永らく希望してゐました邦語夜學をいよいよ一月から開始さるゝ事になりました。今では國語裁縫習字の三科丈にしてゐます。中でも習字は中々盛で尙有望なのですが此爲に特に二人の敎師の與へられた事は感謝の外ありません。他のクラスは從前通り變化はありませんが土地がら只正月中は少し出席が少ない樣に思はれました。近來音樂熱が盛になりましたせいかピアノの希望者が多くて總てに應ずる事の出來ないのを殘念に思つてゐます。

○會員部　當部の委員は以前から計畫し努力してゐた月報を二月號より發行する事を得ました。至つて小さな結實ですけれどほんとうのものにするために皆努力してゐます。學校青年會員で卒業さるゝ大阪在住の姉妹を招待しました。それは卒業後市靑年會と聯絡を取ための懇親の集であります。其際各クラスに別れて我は會話或は製菓聖書問答など其他色々

の遊びなどして非常に樂しく有益に過しました。
○宗教部　毎日曜の午後の集會前にミススタイメットの指導で讃美練習をしてゐますがこれによつて青年會のコーラス團が生れる事を希待してゐます。
○ビージークラブ　は二月二日に本年第一回例會を開きました。かつて見ない多くの集で皆に此後必ず集り度いとの思ひを起させた程樂しいものでした。十一日には此のクラブの主催で有馬溫泉を經て六甲登山を計畫して居ます。
○メープルクラブ　敎會と聯絡をとるために敎會中の若き婦人でつくられたものですが、一月五日敎會の婦人方を招待して手製の茶菓の後遊びました。皆さん何十年振に子供に返つた思がしたと悦ばれました。
○本月中にミスレーガンの歡迎に併せて會員大會を催し河井先生の御出席を願ふ筈です。
○維持金の爲めに活動寫眞をする計畫をもして居ります。

（土屋氏報）

神戸女子青年會報告　下山手通三ノ六五

現在會員數五百三十七名。英語組出席者百十名餘本會はクリスマス以來一寸冬籠りの體でしたが三月から大活動を致しますので今は其準備に忙しくして居ります。去る七日幹部委員會を開き春の仕事について協議をしました。

原田村クラブ。會員で郊外に住んで居られる方が十人程集つて上記のクラブを作られました。これは同地方に住はれる會員諸姉が精神及び生活狀態を向上させる爲に一ヶ月に一回午後二時間一會員の宅で集られ其時間を最も有意義に過さうといふ御計畫なのです。そして會員同志の親しみを增し青年會員としての眞誠を盡し度いといふ何と美しい御考ではありませんか。私共は此樣な極く少さい會合を方々に致しまして會員と會とのもつと親しくなります樣常に意志の疏通を計る事の出來ます樣祈つて居ります終りに河井先生の御歸朝を祝します。

（大呑氏報）

京都女子靑年會報告 （室町武者小路下ル）

會員募集の結果只今迄の總數三百四十五人にて目下如何にして一人一人の會員に接觸いたさんかと考究中であります。諸組は別に變りなく宗教部では此年より每週一回づゝ日高牧師に同志社女學校高等科生に御教を願ふ事になりました。又以前の通り西野貞子先生は大阪より每月第三週の金曜日に御出下さつて、午前は若き家庭にある婦人、午後は女學生晩は有職婦人都合一日に三回御話を願つて居ります。

此頃府立第一高等女學校生徒の間にレンボウクラブを設け、其他看護婦クラブと郵便局事務員のクラブも近々に組織する迄に至つた事を喜んで居ります

當會では初めて開く會でありますが二月十二日より十七日迄の間に三回にわたつて衞生講話會を催す事になりました。十二日は肺結核に付て大阪の鈴木芳夫氏に、十六日は齒の衞生に付て堀內淸氏に、十七日は小兒の養育法に關して佐伯理一郞氏に、どれも世界日曜學校大會の際展覽の衞生掛圖を使用いたして御話を願ふ事にしました。尙十四十五日の兩日は講話なしで只かけ圖のみを展覽いたす考であります。

（林秋氏報）

寄附金（本部事業の爲）

一金拾圓	無名氏
一金五圓	小澤かつ子
	同　きん子
一金貳圓	大平耕成
一金拾圓	ブゼル氏

計金貳拾七圓也

遺愛女學校青年會報告

寒も夢の間に過ぎ此の北海にも春が音づれて參りました。私共の心は望に輝いて居ります。會員は同じ思ひを抱いて神の御事業の一端を御助けせんがために熱心に働き且つ祈て居ります。

さて二月第一の木曜日に役員の改選をいたし、左の如く決定したしました。

會　長　佐藤千代野　副會長　猿川　ヒデ
會　計　成澤　たい　會　計　高橋　愛子
通信書記　山本　智惠　記錄書記　中田　千代
宗教部長　金森　スミ　宗教部顧問本目　テイ
傳道部長　星野　松枝　傳道部顧問井手　のぶ
社會事業部長　大島　春江
同　顧問　佐々木みとし
財政部長　太田　裕
同　顧問　堀川　みち

宮城女學校青年會より

私共の此頃の働を一寸御通知申上ます。

一草津の癩病院や、市内の病院に居る氣の毒な子供や育兒院にクリスマスのプレセントを致す爲に先學期は毎月曜日の放課後委員と有志とで仕事をいたしました。それに引續き今學期も放課後二時半より一時間位づゝ委員が集つて色々の仕事をいたして居ります。皆喜びに溢れて働いて居ります。ほんとうに「働く所に眞の愛」が生ずるといふ事をつくづく實驗して喜びにみちて感謝いたして居ります。

次に二月十四日午後二時四十分より雨天體操場で Valentin Party を開きました。之は此度新しくいらしつたミスナウが非常に青年會に興味を持たれて色々會の爲に御考へ下すつた末、ミスナウが主導となられて開いたのでございます。其日は先生も生徒も全部といふてもよい程出席いたしまして色々の餘興をなし、終りにＹＷＣＡと列を作つて青年會歌を歌

び皆喜びにみちて散會いたしました。之により餘程會の爲に力になり又多くの人に愛とフレンドシップを味はせた事を信じて委員は深く感謝して居ります斯うして段々青年會に興味を持つて下さる先生方や生徒の出でます事を本當に嬉しく存じて益々祈つて居ります。どうぞ本部の皆々様小さいものではございますが、私共此後ともよく祈り、よく働いてます〳〵盛んにし廣く市内にもひろめたいと祈りつゝ働いて居ります私共の爲に勇氣とはげましとを御願申上ます。又御祈の末に御加へ下さいますやうに只管ら御願申上ます。

女子英學塾青年會役員

會長　横山八重　　副會長　梅本愛子
社交部　室原まり子　　集會部　麻田不二子
會計　原てる　　書記　加藤しづ
圖書係　松宮せつ子　　販賣係　宮崎妙子　天野職子

雜誌代領收　大正十年一月廿日より同二月廿日迄

都筑桂子　九ノ十ー十ノ九
シヤフナー　十ノ一ー同十二
酒井愛子　九ノ十二ー十ノ十一
清水竹子　九ノ十一ー十、十
廣瀬かね　九ノ十一ー十ノ十
プレストン　十ノ一ー同十二
岩根美爾　九ノ十二ー十ノ一
伊東道子　九ノ九ー十ノ八
石黒ふみ　十ノ一ー同十二
小原くに　十ノ一ー同十二
濱崎しげ　九ノ五ー十一ノ四
山内カツ　十ノ一ー同十二
久保田しげよ　十ノ一ー同十二
及川コト　十ノ二ー十一ノ一
高木ぬい　九ノ八ー十ノ七
小峰ひで　十ノ一ー同十二
那須左馬　九ノ十二ー十ノ十一
宮島すい　九ノ十一ー十ノ十
岡増秀子　十ノ二ー十一ノ一
岡島一枝　九ノ十一ー十ノ一
雨宮道夫　十ノ一ー同四
田邊克子　九ノ十一ー十ノ十
藤本孝子　十ノ三ー十一ノ二
加古家壽　九ノ十ー十ノ九
白石瀧江　十ノ二ー十一ノ一
女子學院青年會　九年八月ー十年一月分
寺尾晃子　十ノ二ー十一ノ一

ハーベスト會員　九ノ十ー十ノ九
江口郁子　九ノ十二ー十ノ十一
岡村すま　九ノ十一ー十ノ十
高橋春　九ノ九ー十ノ八
横濱英和女學校青年會　十ノ一ー同三
山梨英和女學校青年會　十ノ二ー同三
ヘール　九ノ十ー十ノ九
松岡芙蓉　九ノ十ー十ノ九
松本かな　九ノ六ー十ノ八
水野末子　九ノ九ー十ノ八
上田ふじゑ　十ノ一ー同十二
淺野慶子　九ノ十二ー十一ノ四
三浦タツ　十ノ一ー同十二
工藤せき　十ノ一ー同十二
川俣すゑ　十ノ一ー同十二
廣島女學校青年會　十年一月分
遺愛女學校青年會　十年一月分
田中千代　九ノ十一ー十ノ十
山本とき　十ノ一ー同十二
櫻井純子　九ノ十二ー十ノ十一
市川きく　十ノ一ー同十二
永江きく　九ノ十二ー十ノ十一
甲斐喜與　十ノ一ー同十二
小野寺清子　十ノ一ー同十二
赤倉かね　十ノ一ー同十二

―本部便り―

□二月十一日と云へば寒明け後の寒さは未だ去り切らないにしてもよいお天氣の祝日と子供の時から思ひ込んで居りました。「明日は先生のお着きね、どうかお天氣にしたいものね」「大丈夫よ紀元節はお天氣と定つて居るぢやありませんか」等と一人定めして居たのでございます。所が其朝は全くの曇天、灰色の空は今にも泣き出しそうな様子です。お迎の連中が三々伍々横濱の波止場、新港第四號といふに集りました頃たう〳〵ボツボツやつて參りました。

「あれがコレア丸でせう？大きな聲を出せば聞えさうね」「今檢疫が初まつた所で此所に着くのは十一時頃ですつて」皆の顏が急に長くなりました。おやおやといふ表情です。それも其筈、まだ二時間も間があるのですから。弟さんからの長い手紙を懐から出しかけるYさん、××主義研究といふ其筋の目を丸くさせそうな雜誌を廣げるAさん、KさんHさんを呼び集めて幹事會のプログラムカミテイーを初めるミスA。然し何をしたつて實は誰も落着いては居られないのです。やがて「コレア丸が動き出しました」と誰やらの注進。「旗は？旗は？」と大さわぎ。

私共の歡迎振りは實に振つたもので、横濱青年會の考案になる歡迎の大旗、白地に紫でYWCAと縫ひつけたものは衆目の注意を集めました。二人の旗手は雨にもめげず懸命にそれを振り初めたのです。コレア丸の大きな船體がもどかしい程靜々と近づいて來ます。

「あの柱の側に立つていらつしやるそれ今横をお向きになつたのが先生でせう？　私そう思ひますが、どうでせう」"Do you ? I don't think so."　氣のない聲がきこえます。誰も彼もが先生に見えたり渡邊さんに見えたり、氣のもめる事一通りではありません。見ざる所を眞として旗は勇ましく而も目當なく振られてゐます。やがてまがひもない先生のお顏が見えたかと思ふと、其黑い姿は之より一生懸命には振れないといふ程一心にハンケチを振り初められました誰やらが日本の女性特有の金切聲をあげたのは此時です。それは音樂的でないにしても眞心からの叫びでした。船が岩壁に横着けにされ、先生のお顏がはつきりと見えた時「やうやう今日になりました。先生お歸り遊ばせ」と心の中に繰り返しながら涙ぐまずには居られませんでした少しお疲れのやうでしたがそれでも人並以上にお元氣の先生と、少しお肥りになつたやうにさへ見える渡邊さんとを一年振りにお迎へした私共の喜びは皆様の御想像にお任せいたします。

□オフイスが急に活氣づいて來ました。皆が「さあ之からだ」といふ意氣込で居るらしく見えます。先生は三月上旬關西にミススコツトと共に向はれます。

□本月號は編者病氣のため發行がおくれました。讀者諸氏の御容赦を願ひます。

□學生部青年會の方々に申上ます。役員改選の結果及御會の近況を御報告下さい。三月二十日迄に御送り願ます。卒業なさる方々に本誌の御購讀をおすゝめ下さい。併てお願いたします。

摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度。前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候

△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて且間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。

△振替、東京、貳參七貳參番

「女子青年界」定價及廣告料

定價郵税共

	内地	海外
一部	金十五錢	金拾七錢
一年前金	壹圓五十錢	金壹圓八拾錢

廣告料

一回掲載		
一行	金五拾錢	
四分一頁	金五圓	
半頁	九圓	
全頁	金拾五圓	

年極又は回數により割引有

大正十年二月廿八日印刷納本
大正十年三月一日發行

發行所　神田區錦町一丁目十六番地　日本基督教女子青年會　電話神田三六五二番　振替東京二三七二三番

發行兼編輯人　神田區錦町一丁目十六番地　河井道子

印刷人　芝區櫻田和泉町七番地　前川吉次郎

印刷所　右同所　三成舍

KYOTO

Miss Birdsall returned February 1st from a month's stay in the Philippines and China and after a week's stay with us went to Tokyo to be acting Hostess. Miss Page has come to Kyoto as General Secretary. The Pre-organization Committee gave a tea and supper on February 8th as a farewell to Miss Birdsall and a welcome to Miss Page.

Mrs. Phelps of Tokyo spent two days this month with the foreign Secretaries.

On February 9th the girls from the Sanjo Postoffice came to the Association for the first time. There are fifty-five girls working there and they plan to come to us, fifteen at a time. Another group comes on February 25th.

A group of girls from the Dai Ichi girls high school have organized a Rainbow Club. They have had three meetings and have their program made out for the remainder of this school semester. At the next meeting Miss Nishino is to speak to them, and the following meeting they will entertain their mothers at a foreign tea.

The singing class is proving popular, under the direction of Mrs. Grafton. On the evening of February 5th the class sang at the Y.M.C.A. Song Service.

A series of talks on health has been given and has proved to be very helpful:

Feb. 12th—Tuberculosis and Woman's Responsibility, by Dr. Suzuki of Osaka.

Feb. 14th—Exhibit of the Child Welfare Charts that were shown at the Sunday School Convention.

Feb. 15th—Exhibit.

Feb. 16th—Teeth and Their Care by Dr. Horiuchi of Kyoto.

Feb. 17th—Babies and Their Care by Dr. Saiki of Kyoto. (Dr. Saiki was assisted by a nurse who weighed the babies).

Association "class" they would join for the afternoon—English, Flower Arrangement, Singing, Sewing, Cooking or Bible class. Each group with its leader prepared some "stunt" to entertain the rest, the cooking class making the cake for the company, the English class giving a playlet, etc. The secretaries told of the present work of the Osaka Association and asked the girls to become members. It is hoped that some of next year's volunteer workers will come from these groups, perhaps as leaders of Rainbow Clubs.

Miss Hard's plans for homegoing on furlough in the early summer are unfortunately hastened by the news received by cable February 7 of the sudden death of her father from heart failure. She expects to sail for America very soon. Osaka welcomes Miss Ruth Ragan who came from Tokyo February 14 to take up the work in preparation for Miss Hard's expected furlough absence. Miss Hard has the deep sympathy of a host of friends.

KOBE

On February 7th the regular Board Meeting was held.

A new member of the Board Mrs. Kimura has been elected in the place of Mrs. Fujita. Mrs. Kimura also came from the Yokohama Association, and is the wife of the Head of the Social Service department of the City. She was made secretary, the office having been vacated by Mrs. Katayama, nee Miss Sugi, who has recently been married and gone to New York to live.

At the Board meeting it was decided to ask Miss Kawai to come to Kobe as soon as possible to help start a Land and Building Finance campaign, and also to have a Bazaar to help raise money for this purpose.

Miss Kawai is also to be asked to come to the Annual Meeting, to be held probably the 2nd of April.

Miss Onomi gave a report of the discussion regarding membership which had taken place at the Kwansai Staff meeting in Osaka on the 5th, and it was decided to ask Miss Kawai to have a meeting especially for the Christian women, to arouse them to a sense of responsibility for others who do not yet understand the full meaning of membership.

Mrs. Usa and Mrs. Kimura have already planned to work for all the members in their neighborhood, through calls and a neighborhood meeting. Other districts are to be organized as soon as calls can be made and volunteer workers found. Miss Onomi and Mrs. Kimura are preparing a printed leaflet to give to new members to explain in simple language the meaning of membership in the Association.

The Ministering League of children of the English Church use the Association every Friday for their sewing circle, and the Woman's Auxiliary of the Union Church will have their monthly meeting in the Building on the 25th.

The present membership is 535.

The Louise Club is carefully considering doing a piece of social service in connection with the city Social Service Department.

We are going to attempt a weekly "Good Time" night, both for its intrinsic value, and for the purpose of bringing together the many different departments, so that "the Association" may mean more fellowship than just the particular class or club that each girl may be in.

Two girls who ran away from home in order to escape the marriages which their families were planning, were safely sent home and the parents persuaded to wait their arrangements. One girl on her way to Hawaii, whose money was all used up while she was waiting in Yokohama until her eyes were cured, was helped by her hotel proprietor, who consented to advance the money on Hibi San's assurance that she would be responsible. The money has since been returned.

We are planning a moving picture entertainment in March to raise funds for the general work.

A reception for Miss Kawai is planned for the Residence, which will also be the formal introduction of Mrs. Jordan to the people of Yokohama.

OSAKA

Osaka is almost a twin with Tokyo in issuing an Association paper of its own, "Osaka Christian Young Women," which appeared first in February. The Membership Committee, working with the secretaries, is responsible for this, the publication expense being met entirely by advertisements. This monthly bulletin will be much more effective in keeping the members abreast of the work and purpose of the Association than the membership letters which were formerly sent out at intervals. We hope it will also be very useful in interprating our work to outsiders and in helping win new friends.

In Educational work a long-felt need is being met in night school by the teaching of Japanese subjects. There are five instead of two night school sessions weekly now. Many a girl needs to know her own language better, both for speaking and writing, and a number of girls are beginning this study—kokugo. Japanese sewing is also taught and a class in foreign sewing is soon to begin. Several girls from a nearby Postal Savings station employing many girls are in these new classes. The Foreign Cooking class continues its work with enthusiasm, having recently demonstrated its ability by serving a delicious luncheon to invited guests. Miss Esther Steinmetz who drilled the girls in Christmas music continues her work with them. They are learning to read music by note and already are getting some good results in part singing.

A new club was recently formed under leadership of the Religious Department and is known as the Maple Club. The Business Girls' Club had an especially good meeting and recreation time in February with an attendance of nineteen. They celebrated Kigensetsu the founding of the Empire by a trip to Arima.

Three afternoon parties have recently been held, entertaining in succession the Senior classes of the three mission schools in Osaka, with the purpose of bringing these student Association members into close fellowship with the city Association and claiming them for future membership and service after graduation. The girls chose which

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KWAI)

Volume 18 | MARCH 1921 | Number 3

NATIONAL

Miss Kawai and Miss Watanabe arrived on the "Korea" February 11. Miss Helen Thomas of the Conference Department in New York City was also on the boat, on her way to China to visit her sisters. A luncheon was given by Mrs. Watanabe at the Yokohama Association for the group of secretaries and students who went to Yokohama to welcome these returning friends.

On Saturday, February 19, the members of the National Committee gave a tea at the national residence, in honor of Mrs. Tazu Arai of New York City, who is spending some time in Tokyo. Mrs. Arai was one of the committee of Japanese people in New York City who raised money for a hostel for girls in Osaka. About seventy-five people came to meet Mrs. Arai.

YOKOHAMA

Yokohama was so proud to be the place where Miss Kawai first touched Japan after her year's absence that we got the hugest Y.W.C.A. banner that we could find and waved it in the cold and rain, proudly conscious that one of the nicest persons on that boat belonged partly to us!

Our work goes on with new inspiration, too.

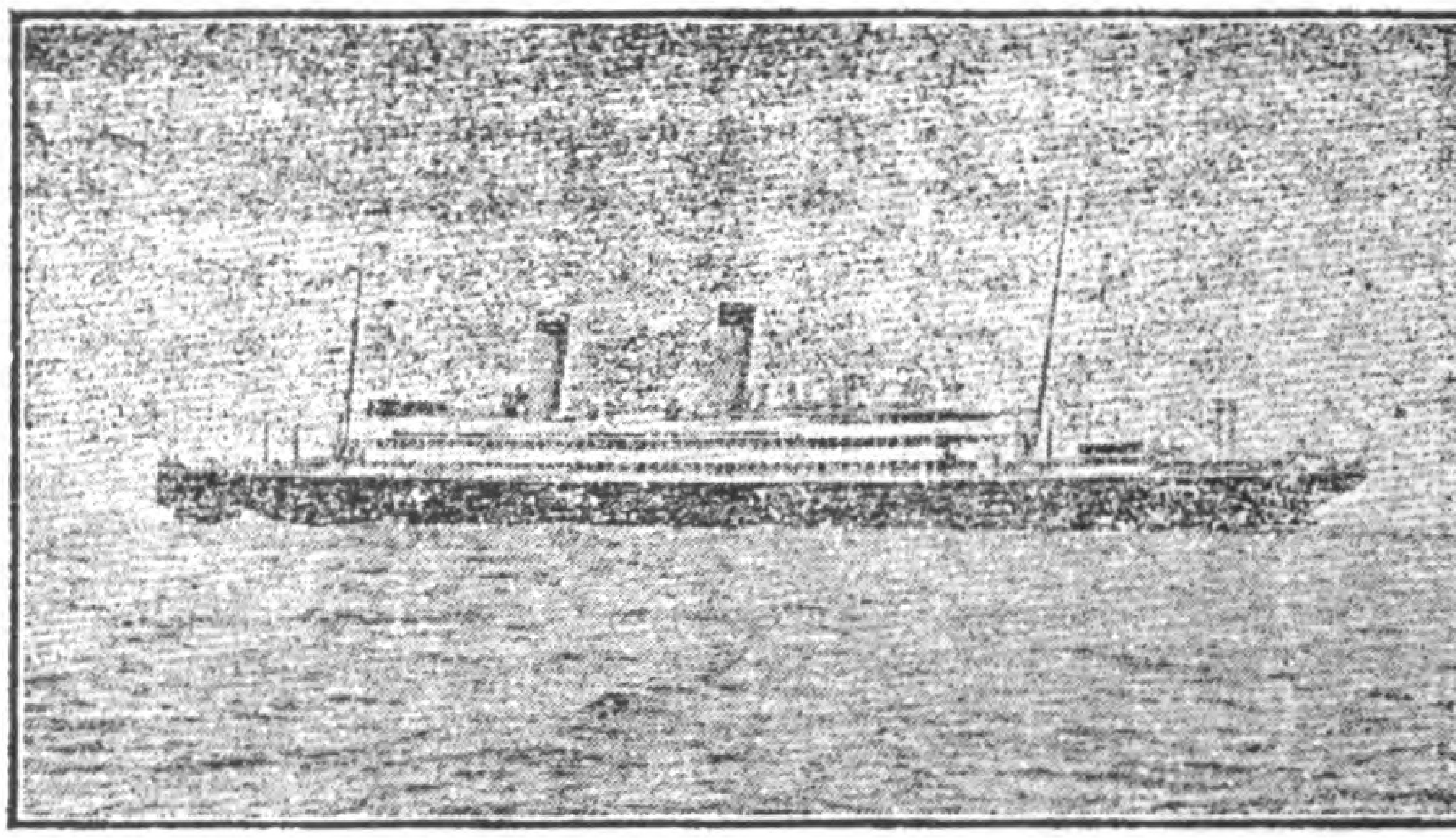
On February 25 we have our supper for the Bible class girls, at which Miss Clara Loomis will talk, and a new English Bible class will be started. There are now between sixty and seventy girls studying Bible.

The Educational department, with its 310 members will have its party in March. This past term 38 new members have come in.

Mrs. Mendelson has undertaken the chairmanship of a new committee which is responsible for guidance of the Emigration, Club and New work. Her fluent English and Japanese and her great capability and enthusiasm make her a tremendous help. She has been a great boon to the Oku Sama Club, which needs her very much.

The last meeting of the Business Girls' Club had seventy members present to listen to a long witty talk on inconveniences of Japanese living, by a woman who has fought her way to support of herself and three children. The next meeting is a party for new members, and the next probably a talk by Dr. Inouye on the health of business girls.

東洋汽船株式會社



本社 東京市麴町區永樂町一丁目一番地（電話丸ノ內 一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三番）

營業所 橫濱市山下町五番（電話本局 四四〇〇、四四〇一、四四〇二、四四〇三、四四〇四番）

出張所（神戶市京町八三番。香港、キングス、ビルヂング。上海四川路ノース、チャイナ、インシュランス、ビルヂング。マニラ、チャコビルヂング。桑港、マーケット街六二五、マーチャンツ、ナショナル、バンク、ビルヂング。紐育、ブロードウェイ、一六五。ホノルル、アレキサンダー、ヤング、ビルヂング。）

北米航路（桑港、布哇ホノルル、、橫濱、神戶、長崎、上海、マニラ、及香港間）

本航路は太平洋航路中氣候溫和、海上平穩なること第一にして船舶の巨大、設備の完全、待遇の懇切とに由り航海最も安全且つ愉快なり

天洋丸	三重螺旋タービン機	排水量	二二、〇〇〇噸
春洋丸	同	同	二二、〇〇〇噸
コレヤ丸	双螺旋機	同	二〇、〇〇〇噸
サイベリヤ丸	同	同	二〇、〇〇〇噸
波斯丸	同	同	九、〇〇〇噸

南米航路（香港、門司、神戶、橫濱、布哇、桑港、羅府、墨國、巴奈馬、秘露及智利諸港間）

本航路は東洋南米間唯一の定期航路なり

安洋丸	排水量	一八、七〇〇噸
紀洋丸	同	一七、二〇〇噸
靜洋丸	同	一四、〇〇〇噸

各寄港地及各國樞要都市に代理店の設置あれば船室保留並に發着日割等は最寄に就て御問合せを乞ふ

女子青年界第十八巻第三號（毎月一日一回發行）
大正十年二月廿六日印刷納本 大正十年三月一日發行 明治卅七年五月七日第三種郵便物認可